

新・こころ

原作 夏目漱石
作 関根信一

登場人物

【明治1】

明治30年（1897年）〜33年（1900年）
中村哲郎（のちの先生）
小宮幸彦（先生の親友）
秋山 静（お嬢さん、のちの奥さん）
秋山加津（未亡人、静の母親）
鈴木敏行（帝国大学学生 東京出身）
滝口政伸（帝国大学学生 会津出身）
小久保良一（帝国大学学生 薩摩出身）
渡邊節子（女学生 お嬢さんの友人）

【明治2】

明治40年（1907年）〜大正元年（1912年）
中村哲郎（先生）
中村 静（奥さん）
木下雄二（私）
木下はる（雄二の母）
木下虎之助（雄二の兄）
医者

【現代】

平成27年（2015年）〜28年（2016年）
中島 徹（「近代文学ゼミ」講師）
藤原柁之（ゼミ生）
市川智樹（ゼミ生）
斉木達也（ゼミ生）
込山健吾（ゼミ生）
富沢瑞希（ゼミ生）
吉永聡美（大学講師）

*

*

*

*

*

平成一九年（二〇〇七年）夏。

鎌倉、江ノ島近くの海岸。

波の音。青い空。

海から上がった中島が歩いてくる。水着姿。

藤原 先生！

藤原が登場。彼もまた水着姿。

藤原 どこに行くんです？

中島 （立ち止まって）やめてくれないか、その呼び方。

藤原 どうしていけないんです。

中島 たしかに君は、僕のゼミの学生だけど。初めに言ったはずだ。僕のことを、先生と呼ぶ
ばないでほしいって。

藤原 じゃあ、なんて呼べばいいんですか？

中島 中島さんでいいよ。ただ、中島さんって。

藤原 でも、僕は先生って呼びたいんです。いけませんか？

中島 ……。

藤原 漱石の「ころ」の先生も、語り手の「私」に「先生」って呼ばれるのをいやがりま
すよね。あれはどうしてなんでしょう？

中島 さあね、卒論のテーマにして取り組んでみたらいいんじゃないか。

中島、歩き出す。

藤原 車ですか？

中島、立ち止まる。

藤原 車ですよ。昨日も今日も、デニーズの駐車場に車をとめて、水着に着替えて降りて
くる。

中島 ずっと見てたのか？

藤原 ええ。友達が近くに住んでるんで、遊びに来たついでに寄ったら、先生が歩いてるの
を見かけて。声をかけようと思ったんですけど……

中島 昨日は、だまって見てたのに、今日、声をかけたのはどうしてなんだ？

藤原 どこまで泳いでいくのか心配になったんで。すみませんでした。

中島 ……僕は、泳ぎが得意じゃないんだ。ジムのプールじゃなくて、今年は海で遠泳に挑戦だと思って、前だけを見て泳いでたら、急に呼ばれたんだ。君に先生って。あやうくおぼれるところだったじゃないか。

藤原 「こころ」の先生も、私に声をかけられますよね。鎌倉の海で。泳いでるさなかに。僕、思うんですけど、あれって、ナンパなんじゃないかなって。

中島 ナンパ？

藤原 ええ、だって、いくらなんでも唐突じゃないですか？ あんな出会いってナンパ以外ありえないでしょう？ しかも、語り手の私は、それから、先生につきまとうんですよ。ストーカーか。

中島 それが、君の卒論のテーマか、「こころ」における私と先生の出会いは「ナンパ」である。

藤原 ええ。

中島 えーと（名前が思い出せない）……

藤原 藤原です。藤原柁之。

中島 藤原くんの。

藤原 ええ、すべての始まりはそこからじゃないかと思うんですよ。どうですか？ この視点？

中島 うすっぺらいね。単なる思いつきだ。

藤原 絶対そうだと思うんだけどな。

中島 そうだと確信する根拠は？

藤原 僕の気持ちです。

中島 ……

藤原 昨日も今日も、先週もその前も、ずっと先生のことを見てて、声をかけてみようと思った、その僕の気持ちは、ほとんど「ナンパ」だったからです。

中島 でも、ナンパっていうのは。

藤原 あ、僕、ゲイなんです。

中島 ……そうなんだ。

藤原 あの岬を曲がった先の岩場が、ゲイのハッテン場になってるって知ってますか？

中島 ……へえ、そうなんだ。

藤原 知らなかった？

中島 知らなかった。

藤原 友達の家が近いっていうのは、言い訳です。本当は、どんなところか一度見てみたかった。でも、想像してたほどじゃないですね。派手な水着やふんどし姿が何人かいるだけ。年齢層もかなり高めだし。

中島 そうなんだ。

藤原 だから、先生を見かけて、思ったんです。何してるんだらうって。

中島 何を言うんだ。僕は、そういうものじゃない。

藤原 そういうものってなんですか？

中島 それは……

藤原 別にいいんです、先生がゲイでもノンケでも。ただ、僕が先生を呼び止めた気持ちは、ナンパだった。それは間違いない。

中島 ……

藤原 乗せてつてくれませんか？ 鎌倉から東京までドライブ。「こころ」の私みたいなストーカーにはなりませんから。あ、なつてもいいのか。そうですよね、それもいいかもしれない。漱石の「こころ」の私そのまんまに、中島先生につきまとつてみたら、何か、おもしろいことがわかるかもしれない。そういう研究ってどうですか？ 体験をもとにした研究レポート。

中島 そんなものに単位はやれないね。

藤原 今までない漱石の「こころ」の研究になると思いませんか？

中島 漱石には、そんなうわついた気持ちは似合わない。特に「こころ」には。もっと冷徹な、厳しいものがあるんだ。あの世界には。

藤原 別に世界を変えようなんて言ってるんじゃないです。ただ、見方を変えてみる。それが研究ってもんなんじゃないですか？

中島 研究か。

藤原 ええ、とつてもおもしろい。

中島 歩き出す。

藤原 あ、待って。乗せてつてくださいよ！

中島、立ち止まり、振り返る。

中島 デニーズで待つてくれないかな。着替えてから、僕も行くから。

藤原 やった！ じゃ、あとで。

中島、歩き出し、退場。

藤原、中島の後ろ姿をスマホで撮影する。

中島 (戻つてきて) 何？

藤原 一〇〇年前にスマホがあったら、絶対こうしてると思うんで。

藤原、中島のとなりに立って、二人一緒に写真を撮る。

中島 一〇〇年前か。

藤原 ええ、一〇〇年とちよつと。

吉永聡美と富沢瑞希が登場する。

そこは大学のキャンパス。講師準備室。午後。

藤原は、以下の会話の中で、学生服に着替える。

富沢 藤原くん、鎌倉で中島先生に振られたって本当？
藤原 うん、デニーズで待っててって言われたんだけど、結局、来なくて。
富沢 いくじなしね。

込山、斉木、市川が入ってくる。

市川 失礼します。あの、吉永先生、中島先生は？

吉永 もう帰ったよ。

市川 なんだ、そうか。

吉永 どうしたの、近代文学ゼミのみんな、そろって。卒論の相談？

斉木 ええ、そんなところです。

市川 じゃあ、いいや。帰ろう。

斉木 富沢さん、これからみんなでカラオケ行こうかって言ってるんだけど、どう？

富沢 駅前？

斉木 うん。

富沢 いいよ。みんな一緒なら。

斉木 何、それ？

市川 気にするなって。じゃあ、行くか。あ、そうだ、藤原くん、込山くん、なんかへこんでるみたいだから、相談乗ってやってくんない？

藤原 どうしたの？

込山 こないだ話したアレなんだけど……

藤原 うん、二丁目で会ったっていう？

込山 他にも男がいたってことがわかった。僕は五号だったんだよ！

藤原 五号って。

市川 他に四人いたってことらしいんだ。

富沢 いや！！

藤原 そんなの別ればいいんじゃないの？

込山 それができたら、苦労はしないんだって。今日、出ない、二丁目？

藤原 今日はいいや。

込山 そうか、じゃあ、あとでラインするね。いろいろ相談に乗ってほしいんだ。卒論のことも。
藤原 いいよ。

込山、出て行く。

吉永 みんな、卒論のテーマは決めたの？ っ、私は関係ないんだけど。市川くんは？

市川 「漱石における江戸寄席文化の影響」

吉永 斉木くんは？

斉木 僕は「戦時下の文学としての夏目漱石」

吉永 へえ。で、藤原くんは、「こころ」でいくの？

藤原 はい。っ、なんで知ってるんですか？

吉永 中島さんとちよつと話したから。

富沢 「こころ」ってどんな話なんですか？

藤原 高校の授業で読んでないの？

富沢 読んでない。

市川 富沢さん、近代文学ゼミにいるんだったら、「こころ」くらい読んでないとまずいんじゃない？

斉木 いいって、あれ、読むの大変だもん。僕も、上、中まで読んで下は読んでないし。

富沢 へえ、どんな話？

学生たち顔を見合わせる。

吉永 先生って人がいてね、この人には不思議な魅力があるのね、鎌倉の海で出会った、語り手である「私」は、その先生の家をたずねるようになって、いろいろな話をするの。就職の願いをしたりとかね。

富沢 テンプレ。

吉永 先生には奥さんがいるんだけど、どうもこの夫婦はうまくいってないようなのね。

「私」は、先生や奥さんと話すうちに、先生の過去を知っていくのね。

斉木 過去って？

吉永 奥さんっていうのは、学生時代、先生が下宿していた先のお嬢さんだったの。この下宿に、先生は、幼なじみのKという友達を連れてきて、一緒に住むようになるんだけど、先生はこの人を裏切っちゃうのね。

市川 そうそう。

吉永 先生は、お嬢さんに恋してるんだけど、Kもお嬢さんが好きになってしまうの。で、先生は、Kがお嬢さんのことを好きだっけ告白したすぐ後に、お嬢さんに結婚を申し込んだじゃうのね。で、ショックを受けたKは自殺するの。先生はそのことがずっとトラウマになっていて、ようやく手に入れた奥さんとの関係もうまくいかないわけ。バカみたい。だったら、そんなことしなきゃいいのに。

吉永 で、それから十年か経って、明治が終わると、乃木大将が殉死するの、で、先生も、私も殉死しようって死んじゃうわけ。

富沢 それって、ものすごく、浅はかなひとたちの話なんじゃないですか？ 説得力あるんですか？ あんまりリアルじゃない気がするんですけど。

吉永 こうやって、話すとしたしかにバカな人たちの話なのかもしれないけど。漱石は、一見、バカじゃないの？と思えるような人のこころの動きを緻密に描いて、それは見事なのよ。

齊木 富沢さんって、クールなんだね。

富沢 そうかな？

齊木 うん。

市川 もう行かない？

富沢 先に行つて。いつものとこでしょ？

市川 ああ。

齊木 ……じゃあ。

市川 失礼しました。

市川、齊木、出て行く。

吉永 藤原くんは、「こころ」のどんな研究がしたいの？

藤原 先生は何で死んだのかを考えたいなと思つて。

吉永 それは、明治が終わつたからつてことなんじゃないの？ 乃木将軍が殉死したから、自分もつて。

藤原 書いてあるのはそうなんですけど、僕、漱石は大事なことを書いてないんじゃないかと思うんです。

吉永 書いてないことつて何？ 書いてないことは研究できないんじゃないの？

藤原 僕、高校の頃、演劇部にいたんですけど、せりふの行間を読むつて大事なんですよ。

書かれたセリフの裏に隠されたほんとの気持ちを考えることが。

吉永 でも、文学作品はそういうもんじゃないんじゃない？ だって、作家が書いてるんだから。

藤原 「こころ」の下の「先生の遺書」はそうじゃないじゃないですか。先生が、私にあてた一人称の遺書は、全部、セリフなんですよ。だから、この行間には、書かれてないことがいっぱいあるんじゃないかって。

富沢 書かれてないことつて何？

藤原 先生のKへの思いとか。

富沢 そういう話なの？ 読んでみなくちゃ！

吉永 それは、書かれてるんじゃないのかな？ あなたの言うこと、私よくわからないんだけど。

藤原 あの遺書、嘘だと思ふんです。

吉永 え？

藤原 だって、遺書にほんとのことなんて書くわけじゃないじゃないですか？ 自分に都合のいいようなことしか書くわけじゃない。

吉永 だって、漱石は書いてるわけでしょう。こういうふうに読んでほしいつていうことを。

それに、作中の先生だって、わざわざあなたにだけは本当にことを話そうって、遺書を送ってるんじゃないかってつけ、たしか？

藤原　そこが、うさんくさいじゃないですか。あなたにだけ本当ってことは、他の人には嘘なのかもしれない。

富沢　他の人って誰？

藤原　たとえば、読者とか。

吉永　ええ？　ちよつと落ち着こう、これはさ、文学作品の話なの、現実に生きた人と混同しちゃだめ。いい？　源氏物語読んで、嵯峨野歩いたりすると、「ああ、ここで六条御息所と源氏が会ったんだなあ」なんて思うけど、それはフィクションだから、モデルになってるだけだから。

富沢　でも、藤原くんの言ってることもわかる気がする。そういう書き方ってあるんじゃないやありません。ミステリーなんかだと、語り手が実は嘘をついてたつてというのが、アガサ・クリステイにあつたと思う。

吉永　それは禁じ手でしょう？　そんなことまでして、漱石が何を書こうとしたつていうの？

藤原　漱石は書こうとしてたかどうかかわからないけど、僕には、あの先生がほんとうのことを言っていないんじゃないかって気がすくするんです。たぶん、自分でもそのことには気づいてないのかもしれないけど。だから、僕はその行間を読んでみようかなって。おもしろそう。がんばってね。楽しみにしてるから。

吉永　じゃあ、やってみたらいいわ。でも、中島さんに相談しながらね。

藤原　はい。

藤原、退場。

吉永と富沢は、舞台のすみに置かれた椅子に腰掛ける。
これ以降、吉永と富沢は、漱石の「こころ」を再現する中島と藤原を眺めている。

場面は変わって、明治の終わり頃。秋の夕刻。

雑司ヶ谷霊園。

中村哲郎が歩いてくる。

後ろから木下雄二が登場。

木下　先生！

中村、おどろいて振り返る。

木下　こんにちは。お約束通り、やってきました。

中村　どうして……。

木下 夏、鎌倉の海でおっしゃったじゃないですか。今度、お宅にうかがってもいいかどうか聞いたら、いつでも来なさいって。

中村 それはそうだけれど……。

木下 さつき、お宅に伺ったんです。奥さんに教えてもらいました。雑司ヶ谷に行ったって。お墓参りだそうですね。もうお参りは済んだんですか？

中村 誰の墓へ行ったか、妻がその名を言いましたか？

木下 いいえ。どなたなんです？

中村 誰でもいいじゃありませんか。あなたには関係ないことです。

中村、歩き出す。

木下 お宅にお帰りですか？

中村 ええ。別に寄るところもありませんから。

木下 お宅にうかがっていいですか？

中村 今日はお帰りなさい。

木下 ええ、でも、せつかく来たんですよ。

中村 妻も困るでしょうから。また、今度。

木下 じゃあ、どなたのお墓参りなのかを教えてください。そしたら、帰ります。

中村 ……。

木下 今日は、先生のところに向かがおうと思ってたんで、これからどこに行くという宛もないんです。先生の後をずっとついていってもいいんですよ。

中村 わかりました。ここには、私の友達の墓があるんです。

木下 お友達のお墓に毎月お参りを？

中村 なぜ、それを？

木下 奥さんに聞いたんですよ。どんなお友達なんです？ 僕もお参りしていきないなあ。

中村 私は、他人と一緒にあそこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえ、まだ連れて行ったことがないのです。

木下 女の方なんですか？

中村 違います。

木下 じゃあ、なぜ内緒なんです？

中村 なぜ、知りたいんです？

木下 なぜ、教えてくれないんです。

中村 ……あなたにお話しようと思っていました。私は、さびしい人間です。ですが、ことによるとあなたもさびしい人間じゃないですか。私はさびしくても動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。

木下 僕はちっともさびしくありません。

中村 じゃあ、なぜ、あなたは、私に声をかけたのですか？ 夏の鎌倉で。そして今日も。

木下 ……それはさびしいからかもしれませぬ。

中村 私には、あなたのそのさびしさをどうしてあげることできません。さびしさを根本から引き抜いてあげるだけの力が、私にはないんです。もう、お帰りなさい。

木下 先生！

中村 私ではない、もっと違う方を向きなさい。

中村、歩き出す。

木下 お友達は幸せですね。先生にお参りしてもらって。

中村、歩いていった。

吉永と富沢が場面に参加する。

富沢 この「先生」って隠れホモなんですか？

吉永 富沢さん、そういう概念は明治にはないのよ。ていうか、近代の日本にはないんじゃないかしら？

富沢 日本って昔から男色っていうのは、あつたんじやないですか？ だから、隠れ男色っていうか。

吉永 男色と同性愛は違うんだって。

藤原 そうなんですか？

吉永 そう。あなたや、込山くんが言ってるみたいに「自分はゲイです」いうのとはね。性的志向が個人のアイデンティティにはなかってなかったってことなんじゃない？

富沢 よくわからないんですけど。

吉永 パンを食べるかご飯を食べるかってことなの、男色っていうのは。それは自分の生き方にはかわらないでしょ？ 日によってはどっちを選んだっていいの。

富沢 ああ、なるほどね。でも、この先生、うさんくさいですよ。なぞめいたこと一杯しやべって、学生ひっかけようとしてるとしか思えない。

藤原 だよな？

吉永 だから、また、そうやって、人物の心理に立ち入ろうとする。漱石は新聞の連載小説として書いていたの。だから、前半はそういうなぞめいた伏線が多いの。それが、最後の「先生と遺書」で全部明らかになるわけ。

富沢 なんだそうなんだ。

吉永 あなた、まだ読んでないの？

富沢 ええ。

吉永 藤原くん、中島先生のマンションに行ったんだって？

藤原 ええ。

富沢 すごいね、どんどんストーリーカーっぽくなってるね。

吉永 いくら一人暮らしだからって、突然行くのはどうかと思うよ。

富沢 吉永先生は、なんでそんなに僕のこと知ってるんですか？

吉永 中島さんに聞きました。
藤原 どんなふうに話してました？
吉永 どんなつて普通だよ。
富沢 ねえ、中島さんってゲイなの？ どうなの？（吉永に）知ってます？
吉永 さあね。本人に聞きなさい。
富沢 なんだかそういうこと聞けない雰囲気があるよね？
藤原 うん。
吉永 （藤原に）あなた、それもよくわからないまま、アタックしてるの？
藤原 いけませんか？
富沢 全然、平気だって。だって、好きなんですよ？
藤原 うん、たぶん。
富沢 じゃあ、どんだんやりなさいよ。マンションだって、どんだん押しかけちゃって。
藤原 うん。

吉永と富沢、すみの椅子に腰掛ける。

場面は中村の家が変わる。

藤原（木下）腰を下ろす。

静が入ってくる。

木下 どうも、すみません。先生の留守に。
静 お気になさらないで。あなたはなぜ先生ってお呼びになるの？ 生徒さんだったわけでもないのでしょうか？
木下 ええ。
静 あの、つかぬことをお伺いしますけれども、あの人はどこでお知り合いに？
木下 鎌倉の海です。この夏に。
静 まあ、海ですか？
木下 奥さんは、行かれないんですか？
静 ええ、私は海水浴は苦手です。あの人も一緒に行こうとは言ってくれませんが。
木下 そうですか？
静 あの、一人でして？
木下 最初に会ったときは、西洋人と一緒でしたよ。
静 西洋の方？ どなたかしら？
木下 背の高い、こう鼻筋の通った男の人でしたけれど。あれはイギリス人じゃないかしら。ご存じですか？
静 いいえ。私はその人のこと、何も知らないんですよ。
木下 そうですか？

玄関の戸が開く音

静 帰ってきましたわ。

静、立ち上がり、玄関へ。
まもなく、中村と一緒に戻ってくる。

中村 また、来たんですか？

木下 ええ、来るなどはおっしゃいませんでしたから。

静 お食事をご一緒しませんこと。すぐ支度しますから。

中村 おい、静。

静 お着替え下さいな。先生。

中村 静。

静 なんです、先生？

中村 なぜ、そんな呼び方をする。

静 木下さんにかがったんですわ。いい呼び方ですわね。先生って。これからは、私も、そう呼ばせていただくことに決めましたの。いけませんこと？

中村 ……。

木下 すみません。

中村 静。

静 なんです、先生？

中村 酒をつけてくれないか。

静 はい、先生。

静、台所へ退場。

中村 何を話したんです？

木下 別に何も。

中村 じゃあ、何で、私のことを「先生」だなんて。あれは、そういうことをおもしろがる女なんです。他に楽しみがないんだから。

木下 僕がやめるように言いましょうか？

中村 ええ、そうして、あなたも一緒にやめてくれるといい。

木下 それはイヤです。

中村 なぜ？

木下 先生は先生なんですから。

中村 あなたたちが妙に親しくなったわけがわかったような気がします。

静が酒の支度をして登場。

中村に酌をする。

中村 お前も一つおあがり。

中村、自分が飲み干した杯をさす。

静 私は……、それじゃあ。

木下、徳利の酒をつぐ。

静、飲む。

静 珍しいこと。私に飲めとおっしゃったことはめったにないのにね。

中村 たまには飲むといいよ。いい心持ちになるから。

静 いいえ、胸が苦しくなるようで。でも、先生は楽しそうね。少し御酒を召し上がると。

中村 まあ、たまにはね。いつもというわけにはいかないが。

静 今夜はいかがです？

中村 今夜はいい心持ちだね。

静 私にもそう見えますわ。

中村 お前はどうかだい？

静 私もいい心持ちですわ。これから毎晩少しずつ召し上がるとよござんすよ。

中村 そうはいかない。

静 召し上がってくださいよ。その方が淋しくなくていいから。（木下に）あなたにも、

木下 しょっちゅうおいでいただけたらと思いますわ。

静 いいんですか？

静 ええ、ぜひ。お願いしますわ。

木下、中村の顔をうかがう。

中村 来たらいい、私がいなくても静がいるだろうから。

木下 はい。寄らせていただきます。

木下、酒を飲み干す。

木下 いい夜ですね。とつても静かな。

静 静かすぎますわ。子どもでもあるといいんですけどね。そしたら、毎日がにぎやかに
なりますわ。

木下 そうですね。

中村 一人もらってやろうか？

静 もらいっ子じゃ……（木下に）ねえ、あなた。

木下 そうですね。

中村 子どもはいつまで経ってもできっこないよ。

静 ……。

木下 なぜです？

中村 決まってるだろ。天罰だからさ。（高く笑う）ハハハハハ、ハハハハハ。

富沢 （立ち上がって）セックスストレスね、この夫婦は。

静と木下（藤原）が退場する。

吉永 富沢さん！

富沢 お邪魔しました。

富沢、退場。

吉永 つらいんじゃない？

中島 え、大丈夫。

吉永 なら、いいんだけど。「こころ」読み直してみたの。藤原くんが言ったみたいに。

中島 書かれてないことを？

吉永 そう。

中島 何か、わかった？

吉永 こういうのもありなんだなあって。

中島 それは、興味本位の偏った読み方じゃないかな。僕は、そんなふうに「こころ」が読まれるのはいやだな。

吉永 でも、それだけじゃないの。なんだかね、どうして、「こころ」の先生は、本当のことを書かなかったんだろうって思い始めたら、それが気になってしまっって。

中島 もろにあの子の影響受けてるんだ？

吉永 富沢さんが、どっかから聞いてきたんだけど、アメリカじゃ「こころ」はゲイ小説のコーナーに置かれてるんだって。

中島 ばかばかしい。

吉永 シンプルに読んだら、そういうことになるんじゃないのかな？

中島 シンプルに読んだら、そんなことどこにも書いてないことがわかるから。

吉永 もっと素直になってもいいと思うよ。

中島 ……。

吉永 前半の「私」の視点で描かれることがらは、真実だと思うの。だとしたら、先生が「私」に向かって話す言葉は、どれもみんな先生のKへの思いを裏付けるもののように聞こえるんだけど。

中島 吉永さんまで……

吉永、新潮文庫の「こころ」を中島に差し出す。

中島 (受け取らず) 持つてる。

吉永 気になる言葉にマークしてみたの。そこだけ読んでみて、どう思うか？

中島、「こころ」を受け取る。

吉永 じゃあね。

吉永、退場。

中島、新潮文庫をぱらぱらめくってみる。ポケットに入れて、歩き出す。

場面は明治の夜に変わる。

木下の下宿の前。

中村 木下くん。いますか？

木下、窓をあけて現れる。

木下 あ、先生。どうしたんです。

中村 散歩に行きませんか？ 遅くにすみません。

木下 かまいやしません。まだ九時前です。すぐ降りていきますから。

木下、降りてくる。

木下 どこに行きますか？

中村 少し飲みませんか？

木下 いいですよ。

場面は変わって、酒場。

木下、ビールのグラスを二つ持ってくる。

二人ビールを飲んでいる。

中村 今日はだめですね。

木下 だめですか？

中村 実はさっき妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです。

木下 喧嘩、ですか？

中村 ええ、あなたも聞いていたんじゃないですか？
木下 僕は……

中村 玄関の戸の前に立っていましたね。

木下 ご存じだったんですね。どうなさったんですか？

中村 妻が私を誤解するのです。それが誤解だといっても承知しないのです。

木下 どう誤解なさるんですか？

中村 妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない。

木下 奥さんはどんなふうに考えてらっしゃるんですか、先生のことを？

中村 帰りますか。

木下 ええ？

中村、立ち上がる。

木下、グラスを片付けて、後を追っていく。

二人歩いている。

木下の下宿の前。

中村 では、お休みなさい。

木下 お宅までお伴します。

中村 もう遅いから。

木下 先生、まっすぐお帰りですか？

中村 ええ。

木下 ほんとうに？

中村 なぜ疑うんです。

木下 先生は、いつもすぐ帰るとおっしゃって、なかなかお宅に帰ってないんじゃないですか？ 奥さんがお嫌いなんですか？

中村 まさか。私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻の方でも、私を天下にただ一人しか知らない男と想ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずですよ。

木下 あるべきはずだということは、幸福じゃないということですか？

中村 ……。

木下 いつも僕と別れてからどこにいらしてるんです？

中村 どこにも行きやしません。ただ、帰らないだけです。いや、ゆっくり帰ってるだけです。

木下 じゃあ、僕もそのゆっくり帰るのにおつきあいます。

中村 ……ただ、帰るだけですよ。

二人歩いている。

向こうを歩く男女に目を向ける木下。

木下 仲がよさそうですね。いかにも新婚ほやほやだ。往来で、ああべたべたされちゃたまらないなあ。夜だと思つて、気にしないんでしょうか？ まったく恋は盲目とは言つたもんですね。

中村 君は恋をした事がありますか？

木下 いいえ。

中村 恋をしたくはありませんか？

木下 さあ、どうでしょう？

中村 したくない事はないでしょう。

木下 ええ。

中村 君は今あの男と女を見て、ひやかしましたね。あのひやかしのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交っていました。

木下 (おどろいて) ええ、そんな風に聞こえましたか？

中村 聞こえました。恋の満足を味わっている人はもっと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。わかっていますか？

木下 恋は罪悪なんですか？

中村 罪悪です。たしかに。

木下 なぜですか？

中村 なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか。

木下 これは恋とは違います。

中村 恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです。

木下 異性と抱き合うのと同性的に向かうのとは、全然違うことなんじゃないですか。

中村 いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。

私は實際の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。

私はむしろそれを希望しているのです。しかし……

僕は先生から離れたりしません。

中村 気を付けないといけませんよ。恋は罪悪なんだから。

木下 ……。

中村 君は、黒く長い髪で縛られた時の心持を知っていますか？

木下 黒く長い髪？ 女のですか？

中村 君は私がなぜ毎月、雑司ヶ谷の墓地に眠っている友人の墓へ参るのか知っていますか？

木下 知りません。奥さんからも聞いていませんし、先生も教えてくれませんから。

中村 この問題はこれでやめましょう。とにかく恋は罪悪ですよ。そうして神聖なものです。では、もうお帰りなさい。

中村、歩き出す。

木下 先生は恋は罪悪だとおっしゃいました。恋にのぼる階段として、先生のところに向かうのが僕のこころだとしたら、それは罪悪なんですか？

間

中村 あなたは熱に浮かされていっているのです。熱がさめると私とのことはきつといやな思い出になるでしょう。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を考えると、なお苦しくなります。

木下 僕はそんなに信用してもらえないんですか？

中村 私は気の毒に思うのです。こころの底から。

木下 気の毒だが信用できないっていうんですか？

中村 特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです。

木下 じゃ奥さんも信用しないんですか？

中村 私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていっているのです。そんな自分を呪うより外にしかたがないのです。

木下 ……。

中村 とにかく私を信用してはいけませんよ。今に後悔するでしょうから。そうして自分があざむかれた仕返しに、残酷な復讐をするようになるでしょうから。

木下 復讐ってなんですか？ 先生、酔っぱらってるんですか？

中村 かつてその人の前にひざまずいたという記憶が、今度は彼の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬をしりぞけたいと思うのです。私は今より一層さびしい未来の私を我慢するかわりに、さびしい今の私を我慢したいのです。

木下 そんな、我慢 なんて……

中村 お休みなさい。

見合う二人。

木下、退場。

中村（中島）一人残る。

吉永 （登場して）先生は、何が言いたかったのかしら？

中島、吉永に「こころ」を渡す。

中島 友人を裏切ったというその事実でしょう。

吉永 それだけ？ それだけのことをこんなにためらいながら、熱く語るの、語ろうとして語れないの？

中島 それだけのことじゃない。それはとても大きなことだから。だから、語ろうとして何度もちごもる。何度も違う話をしようとする。

吉永 先生の言葉は、くちごもり、他の話をする事で、いつそう語れない言葉が見えてくるようなそんな言葉なんじゃない？

中島 まだ。書かれない物語、語られない言葉。そんなものばかり気にしてたら、正しい読み方なんてできやしない。

吉永 あなたは、いつ話すようになるの？

中島 ……。

吉永 別にいいの。でも、「こころ」の先生みたいに、死んでからなんていうのは、やだなと思つて。

中島 まさか。

吉永 自分の中に書けない物語、語れない言葉があることは、許してもいいんじゃないかな？ 書いたり、語ったりしなくてもいいから。ごめん。

中島 ……。

中島、退場。

つづいて、吉永も。

場面は明治の茶の間になる。

静と木下が座っている。

静 あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか？

木下 いいえ。

静 どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから。これでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなんです。

木下 そりゃ先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。

静 私は、先生に聞いたんです。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がないです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです。

木下 奥さん。

静 あなたどう思つて？ 隠さずいつてちょうだい。

木下 僕にはわかりません。でも、先生が奥さんを嫌つていらつしやらない事だけは保証します。先生は嘘をつかない方でしょう。

静 そうかしら。嘘はつかないけど、本当のことも言わないんじゃないかしら？

間

静 実は、私すこし思いあたる事があるんです。あなた判断して下すって。言うから。できる判断なら。

木下 みんなは言えないのよ。みんな言うのと叱られるから。

静 はい。

静 先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あったのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです。

木下 お亡くなりには？

静 言えるのはこれだけ。けれどもその事があつてからなんです。先生が変ってしまったのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。

木下 その人の墓ですか、雑司ヶ谷にあるのは？

静 それも言わないことになってるから言いません。でも、人間は親友を一人亡くしたただけで、そんなに変わってしまうものでしょうか。私はそれが知りたくってたまらないんです。

玄関の戸が開く音。

中村が入ってくる。

静 お帰りなさい。

木下 お邪魔しています。

静 就職先の紹介の話でおいでなんですよ。

中村 それなら、前にも言ったはずだ。何の手伝いもできないって。

静 でも、あなたは学生時分の知り合いが大勢おいでだから。

中村 なに、羽振りよくやってるやつはそんなにいない。いても、人のことなんかかまわないのさ。（木下に）他を当たってくれないか？

木下 田舎で父が寝ているんです。この間は危篤だという知らせがありました。

静 腎臓なんですって。

中村 お前のお袋さんと一緒だ。

静 ええ。

木下 母親が、先生にお願いできないのかとせつつくんです。かたちだけでもいいので、どこか紹介してもらえませんか？

静 これから、帰省なさるんですって。どなたかいらつしやいませんか？ 鈴木さんは？ ずいぶん出世なさったって聞いたけど。

中村 （木下に）何か役に立てるようなら、手紙を出します。

木下 手紙ですか？

中村 ええ、手紙を書きましょう。すぐにはどうこうなるものじゃない。とにかく、帰ってあげなさい。私も動いてみるから。

木下 よろしくお願ひします。それでは……

木下、退場。

静 何か決心されたんですか？

中村 何だい？

静 何か考えてらっしゃるようですわ。なんだかうれしそう。

中村 そう見えるか？

静 ええ。そう見えますわ。

中村 誰かの役に立つかもしれないというのは、いい心もちだね。

静 当然ですわ。

中村 そうだ。便せんはあつたかな？

静 買ってきて差し上げますわ。先生。

中村 静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね。

静 なぜ？

中村 先かな？

静 ええ、きつと先よ。一人になるのはいやですもの。

中村 いや、年の順から言ったら、おれが先だろう。

静 いいえ、私が……

中村 おれが死んだらこの家をお前にやろう。おれの持つてるものはみんなお前にやるよ。

静 もうやめてちょうだい。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通り

にして上げるから、それでいいじゃありませんか。行って参ります。

静、退場。

木下の実家。

障子の奥に父親が寝ている心持ち。

障子の奥から木下と母親のみつが登場。

みつ おまえはいつまでいられるんだい？

木下 お父さんの様子が落ち着いたらと思つてます。

みつ おちつくつてことは、亡くなつたらつてことかい？

木下 そういうわけじゃ。

みつ お前は、早く東京に帰りたくてうずうずしてるんだね。

木下 そんな、母さん……。

みつ 先生からはまだ連絡がないのかい？

木下 忙しいんですよ。

みつ お父さんを安心させてやっておくれ。（障子の奥を見て）八月に天皇様がお隠れに

なって、今度は、乃木大将が殉死されただろう。それから、ずっと、乃木大将に申し訳ない、申し訳ないとうわごとのように。

木下 申し訳ないって、なんなんですか？

みつ 知りませんよ。お父さんは、昔気質の人だから、天皇様が亡くなって、乃木大将まで亡くなって、自分が生きてるのが申し訳ない気持ちなんだろう。

木下 じゃあ、もう長くないのかな？

みつ 何てことを！

兄の虎之助が出てくる。

虎之助 (みつに) 父さんが呼んでますよ。

みつ はい、はい。

虎之助 お前ここへ帰って来るつもりはないか？

木下 兄さんが帰ってくるのが順ですね。

虎之助 本を読むだけなら、田舎でも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちょうどいいだろう。

木下 就職しないと。

虎之助 お前、ほんとに働く気があるのか？

木下 ありますよ。

虎之助 とにかく、おれはこっちに帰ってくるわけにはいかない。お前がいやなら、伯父さんにでも世話を頼むんだが。そうになると、財産のことやらで金がからんでくるからな。木下 兄さんにおまかせしますよ。僕のことなら気にしないで。

虎之助 少しはまじめに考えろ！ いつかはお袋さんを引き取らないといけないんだ。おれかお前かどっちかだ。そんなふうには、いつまでもふらふらしてられると思ったら、大間違いだぞ。

みつが登場。手に大きな封筒の包みを持っている。

その包みは異常に大きい。

みつ 届いたよ。先生からの郵便。何を書いてあるんだろうね？

木下、受け取る。

みつ 早く読んでごらん。きっといい知らせだよ。

木下、封を切って、手紙を取り出し、読み始める。

医者が障子から出てくる。

医者 病人の容体が変わりました。早く来てください。
みつ まあ！ お父さん！

みつと虎之助、奥へ入る。
木下、手紙を読み続ける。

木下 この手紙があなたの手落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とつくに死んでいるでしょう。

木下が手紙を読む間、中村の声が聞こえている。

中村の声 あなたから過去を問いただされた時、答える事のできなかつた勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまうでしょう。私は、やむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました。

木下 この手紙があなたの手落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とつくに死んでいるでしょう。先生！

医者が登場。

医者 なんですか？

木下 えーと、父の容体は？

医者 今夜がやまでしよう。

木下 あと何日か持たせることはできませんか？

医者 それはなんとも。

木下 二、三日でいいんです。東京に行って戻ってくるまで。

医者 あなた、何を言ってるんですか？ お父上ですよ。

木下 なんとかしてください。

みつの声 先生！

医者 今、行きます。

医者、障子の奥へ。

木下、手紙を抱いて、駆け出していく。走る。走る。

木下、舞台の中央に腰掛ける。

そこは、東京へ向かう列車の中。

もう一度手紙を広げる。

中村の声 私の過去をあなたにだけお話ししましょう。私は何千万といる日本人のうちで、た

だあなただけに、私の過去を物語りたいのです。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔にあびせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

木下 先生！

中村の声 この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とつづくに死んでいるでしょう。

木下、退場。

場面は明治30年の帝国大学の教室にかわっていく。

学校の鐘が鳴る。

午後の講義が終わり、学生たちが今帰ろうとしているところ。

中村、鈴木、滝口、小久保、少し、離れて小宮がいる。

小久保 おい、滝口。

滝口 なんだ？

小久保 読んだか、あれ？

滝口 ああ、読んだ。

滝口、本を小久保に渡す。

小久保 どうだった。

滝口 どうって、よくわからん。

小久保 なんだと？

滝口 おれにはよくわからん。

小久保 じゃあ、もう一度読め。もうしばらく貸しておいてやる。

滝口 いや、いいって。

小久保 お前は、この本のよさがわかってない。だまされたと思って、もう一度読め。

滝口 もういいって。

二人の間を本が往復。

鈴木 どうしたんだ？

滝口 小久保が、この本をもう一度読めと云ってきかないんだ。

鈴木 何だ？（本をとりあげて）「賤（しず）のおだまき」。ああ、「平田三五郎物語」か。

小久保 お、知ってるのか、鈴木！

鈴木 明治の初めにずいぶん流行った男色小説だろ。薩摩藩士吉田大蔵と美少年平田三五郎の物語だ。

小久保 ああ、薩摩じゃ年の初めに必ずこれを読む。言ってみれば、男色道におけるバイブルだ。

小宮 バイブルって言葉をそんなところに使うな。

小久保 何が悪い。これは、わしのふるさと薩摩じゃ、大事な大事な本なんだ。

中村 薩摩じゃ、今も男色がさかんなのか？

鈴木 明治の初めならともかく、もう時代遅れだろ？

滝口 ああ、そんなものがいつまでも流行るわけがない。

小久保 何を言うか。薩摩の男色は、鎌倉室町から続く伝統だ。なあ、中村。若い男は、

「二才（にせ）」と「稚児」に分けられる。二才とは元服から妻帯までの若者、稚児は元服以前の少年じゃ。その稚児の面倒をみるのが、二才のつとめだ。

滝口 面倒をみるってどういうことなんだ？

鈴木 いろんな面倒だろ。手取り足取りってやつか。

小久保 稚児は一人の二才だけとしかつきあわん。女などもつてのほかだ。「道の向こうに女が見えたら、穢れが移るから避ける」と言われるくらいだ。

滝口 でも、結婚はするんだろ？

小久保 ああ。

滝口 わけがわからん。

小久保 それが当然だ。薩摩の男はみんなそうしてるんだ。

鈴木 じゃあ、西郷隆盛も。

小久保 ああ、当然だ。

滝口 余計、手に取りにくくなった。

小久保 男色は日本だけの文化じゃない。世界中にあるんだ。（鈴木に）なあ。

鈴木 ああ。イギリスじゃあ、オスカー・ワイルドという有名な作家が、男と恋仲になったことをとがめられて警察につかまったそうさ。

滝口 なんだ、犯罪なんじゃないか。

小久保 そうじゃない、犯罪として取り締まらなくてはいけないほど、流行っているということだろう？（鈴木に）違うか？

鈴木 まあ、そうだろうな。

小久保 ほれ、見ろ。じゃあ、今度はこれを読んでみる。

小久保、違う本を出す。

滝口 （受け取って）なんだ？ 「ひげ男（お）」幸田露伴。

鈴木 「ひげ男（おとこ）」だ。ああ、去年、博文館から出た小説だ。

滝口 露伴がどうかしたのか？

小久保 これは立派な男色小説だ。明治三十年の今も、こうして男色文学は生き続けているんだ。読んでみる。

滝口 いや、いい。

小久保 読め。

滝口 いやだ。

小久保 読め。

滝口 いやだ。

小久保 読め。

滝口 いやだ。

鈴木 お前も、だまって受け取って、読まずに返せばいいだろ。まったく東北人はこれだから困る。

滝口 なんだと？

鈴木 もっとうまく立ち回れって言うてる。お前は会津の出身だろ？ 白虎隊だって、もっとうまくやりやあいいのに、あれじゃ負けてもしょうがない。

滝口 白虎隊を悪く言うな。会津の人間にとって、白虎隊は特別な存在なんだ。あまり大きな声では言えないけどな。でも、悪く言うヤツは許せない。（鈴木に）おまえは調子のいい江戸っ子だ。なんで江戸の人間は、何もしなかつたんだ。

鈴木 誰も頼んでなんかいないだろ。会津にも、薩摩にも

小久保 お、なんだそれは。聞き捨てならないな。

滝口 ああ。

鈴木 文明開化の世の中になったのはいいが、薩長の政府はいろんなものを江戸に持ち込んできたんだよな。薩摩や土佐から来た男色文化ってのもそうだ。

滝口 おれには理解できん。

小久保 お前は骨の髄まで軟派だからな。

滝口 女好きで何が悪い。犯罪者すれすれの硬派よりはました。

小久保 犯罪者とはなんだ？

滝口 新聞種にもなってるじゃないか。上級生が下級生を待ち伏せして襲うって。そんなものが文化なんて大きな顔をするな。

小久保 そういうやつもいるが、世の中は、一事が万事で全部を悪く見ようとする。本来の男色はそんなものじゃない。もっと、強い、もっと厳しい、そして美しいものなんだ。

滝口 おまえは、近頃の女権拡張論者のように、男色文化を守ろうとしている。でも、それは時代遅れだ。富国強兵の世の中に、子どもを生まない、そんな関係は無意味だ。すたれていって当然なんだ。

小久保 じゃあ、一步譲って、それでもいい。だからこそ、男色には、滅びの美学があるんだ。これでどうだ？

滝口 どうだってなんだ？ わけがわからん。

小久保 だまされたと思って読んでみる。幸田露伴だぞ。

滝口 いや、いい。

小久保 （中村に）じゃあ、お前に貸してやる。

中村 あ、おれは……、じゃあ、借してもらおうか。

滝口 借りた……。

小久保 ちゃんと読めよ。

中村 ちゃんと読むって。

小久保 ほんとか。まあ、いいや。滝口よりは、話がわかりそう。

中村 なんだ、話がわかりそうってのは？

小久保 こいつを読んで、どう思うかで、お前が硬派か軟派かがわかるんだぞ。

鈴木 そいつはおもしろい。早く読め、今、ここで読め。

中村 やっぱりよすわ。

中村、本を返そうとする。

中村 本の一冊や二冊で、硬派か軟派か決めつけられちゃかなわない。

鈴木 まあ、読んでみたらいい。さすが露伴だ。ずいぶん読ませるから。

小久保 お前、読んでたのか？ 早く、それを言えって。

鈴木 言っておくが、おれは軟派だからな。

中村 どんな話なんだ？

鈴木 長篠の戦いを舞台に、徳川勢に対する武田の男たちの姿を描いた軍記物だ。武士とその愛人の美少年が一緒に死ぬのが主題になっている。

小久保 そうだ、そうだ。

小宮 男色小説はみんなそれだ。一緒に死ぬか、後を追うか、そんなのばかりじゃないか。小久保 そののどろが悪い、男女の心中物と少しも変わらない。恋愛物の王道だ。ちよつと

聞いて見る。(読み始める)

「忠次、「如何にも心得たり、直ちに」出でん」と、云いながら床几を離れて立ち上がり、着たる鎧の上帯を一揺り揺って締め直し、きつと小太郎に向かい、「我、もはやそなたと語る暇なし、心を決して我が意見に従え」

鈴木 (本を取り上げて) お前じゃわからん、おれが読む。

小久保、鈴木の話談調の朗読に合わせて動く。

鈴木

「我、もはやそなたと語る暇なし、心を決して我が意見に従え」と言葉に力のあらん限りを籠めて云う。云うより早く、「いいや、仰せなれど従い申さじ、今生にただ一つの御願いなるを疾く快く聞き入れて今すぐ離れたまえよ」と寸とも動かぬ若木の一徹。忠次これに慥然として天を仰ぎつ語を絶せしが、たちまち大鷲の小鳥なんどをつかむがごとく小太郎をば左手に引き抱えて肩に乗せると、右手には地に横たわれる薙刀拾いて外につと出で、篠突く雨中をはせ抜けて遙か隔たりし富沢孫太夫が陣に走り入る。言葉も険しく、「孫太夫殿、頼む、あたら若者、死に急ぎする、そなたの隊につけて、ただ場数ひとつ懸けさせてくれ、頼む」、といえば、孫太夫、

戰場慣れし武士の物の悟りの早きこととて、「むむ、合点した、殺すまいぞ、頼まれ
たわ」、とわれ鐘声。地に下ろされて初めてここに連れ込まれしを解せし小太郎、
本意なき面持ちして物言いたげなるを、忠次は笑いに顧みていとやさしく、「我が
手にはつけ難くこの隊につける、死に急ぎ無用ぞ、我が言聞け」、と云いながら抱り
あいたる手をば緊しく締めて、放ちて、さらばと一声、面も見せず疾風のごとく駆
け出でし。」

間

小久保 いいなあ。情景が浮かぶようだ。

鈴木 さすが露伴だ。

滝口 講談みたいだな。

鈴木 おれの読み方は寄席仕込みだからな。お前、繰り返し読んでるだろ。ここだけ、よれよれだ。

小久保 ああ。名場面だ。もう一度、読んでくれないか？

鈴木 もういいだろ。

小久保 頼む、もう一度。おれは聞き惚れた。

鈴木 薩摩の男色はもつと男らしいんじゃないか？

小久保 なんの、これが薩摩の男らしさだ。全部、読みたくなっただろ？ 中村の次に貸してやるからありがたく読め。

滝口 あれだけ聞いたら、もう十分だ。じゃあな。

小久保 どこに行く？

滝口 図書館だ。明日の予習だ。

小久保 じゃあ、おれも。

滝口 じゃあって何だ？ 言っておくが、おれは軟派だぞ。

小久保 それがどうした？

滝口 他を当たれよ。

小久保 お前をどうしようとは思わん。

滝口 そうか。

小久保 (鈴木たちに) じゃあな。

滝口 じゃあ。

小久保と滝口、出て行く。

中村 (小宮に) めずらしいな、お前がこんな話をいつまでも聞いているなんて。

小宮 下らん話をいつまでしているのかと思ったただけだ。

小宮、出て行く。

鈴木 あいつも、もっと素直になりやいいのになあ。

中村 昔からああだ。

鈴木 お前みたいなやつと一緒にいて、どうしてあのままにいられるのか、おれにはわからん。

中村 おれみたいなやつとはなんだ？

鈴木 そうだろう。子ども時分からずっと一緒にいたら、もっと似てくるもんじゃないか？

中村 そういふもんな？

鈴木 そういふもんだ。

間

中村 お前、卒業したらどうするんだ？

鈴木 おれは、そうだな。留学がしたいな。

中村 どこに行く？

鈴木 とりあえずはイギリスかな？

中村 男色の都か？

鈴木 まぜつかえすな。今の世の中、出世するには留学が一番だ。それにおれは、この日本にいたくないんだ。このまま卒業してふらふらしていたら、徴兵される。そんなのたまらんからな。本籍を北海道に移そうかと思う。

中村 まだ、そんなことができるのか？

鈴木 ああ、抜け道はいくらでもあるんだ。

中村 そうか。

鈴木 お前は どうするんだ？

中村 おれは、わからん。

鈴木 まだ決めていないのか？

中村 ああ。実を言うと、叔父にだまされた。

鈴木 ええ？

中村 毎年、夏には実家に帰っていたんだが、そのたび、叔父が自分の娘との結婚をおれにすすめるんだ。

鈴木 縁談か？

中村 ああ、二親が死んだあと、ずいぶん世話になった叔父だ。親代わりと言ってもいい。だが、おれはまだ身を固めたいとは思わないから、断った。去年の夏だ。今年の夏、帰ったら、今度は手のひらを返したようにそっけない。不審に思っただら、叔父はおれの親父の遺産を使い込んでいた。隣町で議員をやっている、大人物だと噂される叔父がだ。

鈴木 お前を自分の娘と結婚させて、使い込みをやむやにしようっていう魂胆か。

中村 おれは、人が信じられなくなった。
鈴木 それでどうした？

中村 間に人に入ってもらって、金はなんとか取り戻した。叔父とは縁を切った。
鈴木 おお、それはたいしたもんだ。今やお大臣さまか。

中村 そんなもんじゃやない。ただ、あくせく働かなくてもいくらかの金は手元に残った。
鈴木 そいつはうらやましいな。思う存分、好きなことができて。

中村 ああ。

鈴木 (あらたまつて) お前の好きなことって、何なんだ？

中村 ……さあ、何だろう？

鈴木 相変わらずだな。

中村 とりあえず、新しい下宿を探そうと思う。

鈴木 今のところだって十分いいところじゃないか？

中村 気持ちを変えるんだ。引っ越しは手伝ってくれよ。

鈴木 ああ。

鈴木、中村の荷物を受け取って退場。

中村、歩き出す。

小宮が暮らす寺の庫裏の前。

中村 おーい、小宮。いるのか？

奥から小宮が現れる。

小宮 何の用だ。

中村 散歩してて、気がついたんだ。このあたりにお前がいたんじゃないかって。

小宮 散歩か？

中村 ああ、今日はいいい天気だからな。お前のことも気になって。ずいぶん出てこないから、みんな心配してるぞ。

小宮 みんなってのは誰だ？

中村 小久保に滝口に鈴木に、あとそれから……

小宮 あいつらが、心配なんてするわけないだろう。みんな自分のことばかり、どうやって出世するか、その算段ばかりしてるんだらうに。

中村 そんなに悪く言うもんじゃやない。静かないいところだな。こういう寺は、学問をするのには、ちょうどいいかもしれないな。

小宮 そうか。まあ、そうだな。

中村 上がっていてもいいか？

小宮 ……何もないけどな。

場面は、かわって、寺の庫裏の片隅。小宮が寝起きしている一間。

中村 ほんとに何も無いな。

小宮 いるものしか置かない。

中村 すわるぞ。

小宮 ああ。

小宮、本を読み始める。

中村、その様子をだまって見ている。

中村 おい。

小宮 なんだ？

中村 何、読んでるんだ。(本を見て) 聖書か？ 寺で聖書はまずいんじゃないか？

小宮 かまうもんか。仏教は、すべてを許す教えだ。耶蘇の寺で経をとねるのは、まずいかもしれんがな。

中村 そういうもんか。

小宮 そういうもんだ。このキリストの教えってやつは、赦す赦すといいながら、罪ある者は容赦なく、断罪する。殺人、暴力、姦淫。石を持って追い、死を持って報いよ、だとき。

中村 そいつは厳しいな。

小宮 日本の仏教が独特なんだ。おれは、古今東西の經典に目を通したが、そのたび、この国のいいかげんさにおどろかされた。コーランも聖書も、罪を許さない。

中村 キリストの教えは、「許し」なんだと思っていたがなあ。

小宮 おれもそう思っていたんだ。だが、この教えの根っこには、自分と違うものを赦さない、一神教の厳しさがある。日本は、何しろ八百万の神だからな。世間を騒がしている学生の男色だって、異人の宣教師は眉をひそめているっていうじゃないか。

中村 おれも、あれはどうかと思うな。刃傷沙汰にまでなるなんて。

小宮 ああ。

間

小宮 ……もう、いいか？

中村 あ？

小宮 お前は、散歩のついでに、立ち寄った。たいした目的もなしに。これだけ無駄話をしたら、もう満足だろう。帰ってくれないか。

中村 なんだよ、その物言いは？

小宮 おれは、言葉を飾れない。お前とは違うからな。

中村 何だよ、おれと違うって。
小宮 気にするな。じゃあな。

小宮、中村に背を向けて、また聖書に向かう。

中村 用事がないというのは、嘘だ。散歩のついでというのも。お前におれは会いに来た。
小宮 なんだ？

中村、一通の手紙を小宮の前に置く。

中村 お前の姉さんからだ。心配してるぞ。行方しれずになったんで、おれのところに消息をたずねてきた。母親がわりの姉さんだろう。なんでそんなことするんだ。

小宮 ……。
中村 読めよ。

小宮は手紙を取り上げない。

小宮 お前の話で内容はわかった。心配はするが、何もできなくて申し訳ないと泣き言が並べてある。おれが心配なんじゃない。自分が心配してるってことを、おれに知らせただけなんだ。

中村 お前は どうして そうなんだ。人のこころってやつを悪く悪くとうとする。
小宮 それが性分だ。今さら、変えようとは思わない。

間

中村 引っ越してこないか？ おれのところに。

小宮 なんだ、急に。

中村 おれが新しく引っ越した小石川の下宿屋なんだが、座敷の手前に三畳の控えの間がついてる。いつもは通り道にしているんだが、こんなところよりは、ずっと暮らしやすいだろう。今のまんまじゃ、そのうち、身体をこわすぞ。

小宮 おれの身体だ。お前には関わりないことだろう。第一、そんなところに住むだけの金が、おれにはない。寺男のような仕事を時々手伝う代わりにこの庫裏に住まわせてもらっている。

中村 あんまり、自分を痛めつけるものじゃない。

小宮 なんだと？

中村 お前、鏡を見たことがあるか？ ひどい顔してるぞ。少しは身体をラクにして遊んだ方が、将来のために得策だ。

中村、小さな鏡を取り出して、小宮に向ける。

小宮 女みたいなやつだな。

小宮、顔を背ける。中村、手鏡をしまう。

中村 金なら心配するな。おれは、控えの間込みで借りてるんだ。家主は、すっかり者の未亡人だ。女学校に通ってる娘が一人いる。二人とも、気持ちのいい人たちだ。お前の話をしたら、何も気にすることは無い、いつでも来るようにと言ってくれた。

小宮 お前の世話にはならない。

中村 気になるな。おれの世話じゃない。ただ、ほうっておけないだけだ。お前の姉さんから、こんな手紙をもらうのは、もういやだからな。学問を究めたいというのはわかる。だが……

小宮 おれは、学問したいわけじゃない。意志の力をやしなうって、強い人間になりたいんだ。そのためには、窮屈な境涯に身をおかないといけないんだ。いい麦は荒地で育つんだ。強い馬は北風に頭を向けて立っているんだ。

中村 それはそうかもしれない。いや、そのとおりだ。おれも、そうありたいと願っている。お前のそういう姿勢は、いつも、おれを正しい方向に向かせてくれる。初めて会った時から、おれの前にはお前がいた。こうして、どこでどうしているのか、わからない状況はつらい。一緒に暮らして、同じ向上の道を歩んでいきたいんだ。

小宮 また、そうやって言葉を飾るのか？

中村 そんなつもりは……

小宮 すまん。もう帰ってくれ。

中村 小宮！

小宮 帰れ！

中村、小宮の前に跪く。

中村 こうして頼んでもだめか？ 言葉じゃなく、こうして頭を下げて。

小宮 やめろよ。

中村 いや、やめない。頼む、一緒にいてくれ。お前のためじゃない。おれのために。おれの向上の道のために。

長い間

小宮 (腰をおろして) ほんとに、金ないぞ。

中村 (微笑んで) 心配するな。

小宮と中村。退場。

秋山家、茶の間

夕方。

加津が入ってくる。続いて、鈴木と中村。

加津 まあまあ、お待ちしていましたよ。みなさん、ご一緒だったんですか？

鈴木 ええ、手伝いになり出されました。

加津 そんな大荷物なんですか、引越してくるお友達は？

鈴木 いえ、小宮じゃなくて、こいつに頼まれたんですよ。どうせあいつは、ほっといてくれって言ったんだろう。

中村 ああ。

鈴木 相変わらずだな。ここでいいのか？

中村 ああ。

鈴木 よし。

鈴木、退場する。

加津 ほんとうにいいんですか？

中村 いいですよ。いいって言ってくれたじゃないですか。そうだ、食事代は、小宮の食事代ですけど、僕が二人分を一緒にお渡ししますんで。あいつには内緒にしておいて下さい。

加津 いいんですか、そんなことして。お友達なんでしょう？

中村 つまらないことを気にするヤツなんですよ。

加津 あなたはいい方ね。わかりましたよ。

鈴木、小久保、滝口が入ってくる。

小久保と滝口は、丸く平たい大きな風呂敷包みを抱えている。

小久保 おい、押すなって。

滝口 押してないって。そっちをも少し立ててみれって。

鈴木 新品なんだ、傷つけるなよ。

加津 あら、まあ、それはなんですか？

鈴木 お茶の水に知り合いの家具屋がいるんですよ。そいつに注文して作らせたんです。

加津 おやおや、それは大した。あなたたちからの引越しのお祝い？

鈴木 違いますよ。これを注文したのは、中村です。なあ？

中村 ええ。

加津 あなたが？

会話と同時進行で、風呂敷がほどかされると、足が折りたたためるようになった卓袱台が現れる。

卓袱台は部屋の中央に置かれる。

中村 あの、これで食事をしたいと思うんです。

加津 は？

中村 これまでは、客扱いで、部屋まで食事を持ってきてもらっていましたが、小宮も来ることだし、二人分は申し訳ない。だったら、茶の間でみんな一緒に食った方がいいんじゃないかと思っただけです。

加津 みんな一緒に？ 私と静と、あなた方？

中村 ええ！

小久保 西洋じゃ、こういうテーブルを囲んで会食をするんですよ。

滝口 なんだか、照れるんじゃないかな？ こう顔を合わせて飯食うなんて。

鈴木 しかもご婦人方と一緒にだからな。あ、お前、それが目的で！

中村 違う、違う。

瀧口 お嬢さんは、女学生なんだから？ え、女学生？

鈴木 繰り返すな！

瀧口 ああ、そうか、そういう手があったか！

小久保 お前、心の底からうらやましがってるな。

瀧口 一つ屋根の下に、女学生がいるなんて……（中村に）なんで、おれに声をかけてくれなかったんだ。

加津 あなた方、何を言ってるんですか？（中村に）あなた、そんなことお考えなんですか？

中村 違いますよ。小宮は、家族に恵まれない男です。こちらに世話になるようになって、僕は、奥さんとお嬢さんから、家族の暖かさをいただいたんです。その暖かさで、氷のような小宮の心を溶かしてやりたいんです。

加津 私たちにそんなことができるんでしょうか？

中村 できますとも。

鈴木 ええ、奥さんとお嬢さんにかかれば。

小久保 あの小宮だって。

滝口 女学生か……

鈴木 おい！

中村 あいつ、遅いな。道に迷ってるかもしれない。

鈴木 このあたりの路地は田舎者には不案内だからな。見てこよう。

中村 ああ、頼む。

玄関の戸が開く音。

小宮の声がある。

小宮 ごめんください。

中村 来た。おい、遅いぞ。

中村、玄関先に出て行く。

鈴木と滝口も。

加津 (小久保に) ようやくおいですね。まあ、どんな方かしら？

小久保 (卓袱台を見ながら) いい細工ですね。中村が、ああでもないこうでもないって、いろいろ注文つけたんですよ。僕もお茶の水に付き合わされたんです。思い通りに仕上がったときの、あいつのうれしそうな顔といたらなかったですよ。

加津 まあ、そうですか。ひと言、言ってくれればいいのに。

中村、小宮が登場。後から鈴木、滝口も。

小宮は、小振りな行李と本を包んだ風呂敷包みを自分で持っている。

中村 奥さん、これからお世話になります小宮です。

加津 まあ、小宮さん。

小宮 世話になります。

加津 よろしくお願いしますよ。お荷物は、それだけ？

小宮 ええ。

加津 まあ、男の方はね。お茶を入れますから、お入りなさいな。

小宮 部屋はどこでしょう？

加津 ええ、廊下の奥の右手ですけど。

小宮、だまって茶の間を出て行く。

中村 おい……すみません。

中村、後を追って出て行く。

加津 あら、まあ。

鈴木 すみません。ああいうやつなんです。

滝口 (小久保に) 玄関先で顔を合わせたら「なんでいるんだ？」って聞かれた。目を見ずに。

鈴木 中村に頼まれたんだったって言ってやったけどな。

小久保 お嬢さんに会いに来たって言ってやればよかったのに。

鈴木 そんな話したら、あいつ、帰っちゃまうんじゃないか？ (加津に) ま、そういうやつな

んですよ。

加津 気むずかしい方のようですね。

玄関先から声。

静 ただいま。

小久保・鈴木 お嬢さんだ！

加津 お帰りなさい。みなさん、おいですよ。

静が入ってくる。学校の帰り。友人の渡邊節子も一緒に。

節子 おばさま、おじやまさまです。

加津 おや、節子さん、お久しぶり。

節子 静さんにお貸ししていた女学雑誌をいただきに上がりましたの。

加津 まあ、ごめんなさいね。ずっと借りっぱなしで。実は、私が読ませてもらっていたんですよ。

節子 お気になさらないで。差し上げてもしっかりいんですけど。静さんが、借りっぱなしでもらうのは気持ちが悪いつて言うものですから。

滝口 女学生だ。女学生の会話だ。しかも、二人だ。

静 今日はどうなすったの？ 引越しのお手伝い？

鈴木 ええ、そうなんですよ。

静 そちらは？

鈴木 あ、滝口です。挨拶しろよ。

滝口 あ……（小声で）初めまして。

鈴木 これだから、東北人は困る。おい、挨拶くらいちゃんとしろ。

滝口 滝口です。

節子 それは聞きましたわ。ねえ？

静 ええ。おもしろい方。

滝口 おもしろいですか？

小久保 よかったな。

滝口 ああ。

小宮と中村が戻ってくる。

小宮 このうちは、いつもこんなに賑やかなんですか？

加津 いいえ、どうしたんでしょうね。

静 中村さん、私の友達の節子さん。前にもお話しましたわね。

中村 どうも。

節子 はじめまして。

中村 お嬢さん、小宮です。今日から、お世話になります。

静 小宮さん。よろしくお願いいたします。

小宮 ……。

小宮、黙って、部屋を出て行く。

中村 おい……。参ったなあ。

節子 まあ……。

秋山家、茶の間。

卓袱台の前に加津が座っている。

夜。

中村がやってくる。

加津 中村さん、小宮さんのことなんですけど。

中村 なんですしょう？

加津 あの方は、いつもあんなに機嫌が悪いんですか？

中村 機嫌が悪い訳じゃありません。あれは、あいつなりの照れなんですよ。

加津 別に愛想良くしろとは言いませんけど。何を話しても、突っ慳貪な返事ばかり。あれでは、困ってしまいますわ。

中村 あいつは、子どもの頃、養子に出されたんです。元々の家は、寺だったんですが、ずいぶんひどい目にあって。おかげですっかり、人を信じないようになっちゃったんです。でも、あいつはいいやつです。やさしいやつなんです。あの頑固な鎧の中には、やわらかな心がちゃんと入っているんですから。

加津 そうですか。

中村 はい。

加津 男の方たちの友情というのはいいものですね。あなたたちを見ているとほんとうにそう思いますわ。私の夫も、生前はずいぶんいろんな方とおつきあいがあったものですけれど、この家もすっかり淋しくなっちゃいました。

中村 奥さん。

加津 わかりました。あなたのおっしゃるようにつとめてみましょう。新しく息子が二人できたような気持ちになっちゃってね。

中村 はい。よろしくお願いします。

加津と中村、退場。

節子と静、登場。

学校からの帰り道。

節子 ねえ、静さん。どんなお気持ち？

静 どんなつて？

節子 だって、見ず知らずの殿方が、同じ屋根の下にいるのでしょうか？

静 どんなも何もないわ。あの人たちは、うちに下宿しているだけですもの。節子さんのところにも男の方ならおおぜいいるじゃないの？

節子 あれは使用人ですもの。静さんのところとは違うわ。

静 どう違うの？ 同じ男の人よ。

節子 それはそうだけれど。何て言ったらいいのかしら。そうだわ。使用人にはときめかないけれど、下宿人にはときめくのではないかしら？

静 ときめく？

節子 そうよ。静さん、女学雑誌を読んでいるくせに、ときめくも知らないの？ ときめくつていうのは、何て言ったら、いいのかしら。こう、その方のことを考えると、動悸が激しくなるような、ぼーっと頬が染まるのを感じるような。そんな気持ちのことを言うのよ。

静 はやり言葉を使うのが好きね、節子さんは。

節子 ええ、女学生ですもの。静さん、私たち、女学生は、この明治の御代の最先端にいるのよ。これまで、女に学問はいらさない、結婚して、子どもを生みさえすればいい。ただ、それだけの道具だったんだわ。でも、もう時代は変わったのよ。私たちは、一人の人間として、生きていくの。結婚だけが人生じゃないわ。子どもを生むことだけが生き甲斐じゃないわ。私たちが大事にしなくてはいけないのは、ときめくことよ。生きたこころを持つことよ。

静 私は、いいわ。

節子 どうしたのよ、静さん。この間まで、中村さんのことを話す静さんは、とてもときめいているように見えたのだけれど。おかしいわね。

静 (狼狽して) そんなことないわ。

節子 節子の目はごまかせなくてよ。

静 (逃げて) やめてちょうだい。

節子 私たち、親友よね。本当のこと、話してくれるわよね？

静 節子さん……

節子 (思いつく) 小宮さんがいらしてからね。あなたのそのときめきがなくなったのは？ どうしたの？ まさか、小宮さんに心移したのではないでしょうね？ まあ、この浮気者！

静 節子さん。

節子 あら、でも、だったら、静さんは、小宮さんにときめいているはず。

静 もうやめてちょうだい。

節子 違うわよね。何があったの？

静 今度はあなたのと きめきの話をしてちょうだい。

節子 まずあなたからよ。ねえ、何があったの？

静 何もないわ。だから、ずっと言っているじゃないの、あの人たちは、うちに下宿して
いるだけなのよ。私なんて……、私なんて、何とも思われていないのだけわ。

節子 でも、お食事は一緒にしていらっしやるのでしょ？

静 ええ、あの日、中村さんが買ってきたテーブルに座って、みんなで食べるのだけれど、
小宮さんは、ご飯ですよと声をかけてもなかなか出てこないの。

茶の間で加津が夕食の支度をしている。

中村が、帰ってくる。

中村 ただいま、帰りました。

加津 おや、お帰りなさい。ちょうどよかった。一緒に召し上がりますか？

中村 はい。小宮は？

加津 それが、勉強中だから、部屋で一人で召し上がるっておっしゃって。

中村 またですか？

加津 中村さん、私思うのですけれど、いやなものを無理にお誘いするのはどうかしら？

中村 何がいやなものですか。あいつは、照れているだけですよ。気にしないでください。

加津 でも……

中村 わかりました。僕が呼んできます。

中村、退場。

静 ただいま。

加津 おかえりなさい。

静 またなの？

加津 ええ、また。

静 いやなら、いやでほうっておけばいいのに。

加津 私もそう言っているのだけれど。

静 でも、なぜ、いやがるのかしら？

加津 お勉強だそうですよ。

静 小宮さんは、お勉強ができるのでしょ？

加津 さあ、どうかしら？ 私には中村さんの方が出世しそうな気がするけれど。

静 そうね。いくら勉強ができて、ああ、気むずかしくてはね。

中村と小宮がやってくる。

中村 おい、ここに座れ。

小宮 ……。

小宮、静から遠く離れてすわり、本を読んでいる。

加津 ちよつとお待ちくださいね。あなたもお着替えなさい。

静 ええ、まだいいわ。

加津 行儀の悪い。

加津、台所へ立つ。

中村 今日は、お早いお帰りですね。

静 ええ、今日は節子さん、風邪を召してお休みでしたの。

中村 あの人も風邪をひくんですね。

静 まあ、当然ですわ。急に冷えてきましたもの。学校の庭の銀杏が、それはきれいに黄葉して。帝大にもきれいな銀杏並木がありますわね。

中村 あ、そういえばそうですね。男どもは無粋だからもみじなんて見やしない。こいつはいつも下ばかり向いているからなおさらです。(小宮に)なあ。

小宮 ……。

間

静 小宮さん、お部屋の火鉢に火はありまして？

小宮 ありません。

中村 なんだ、だったら、すぐ言えよ。

静 では、あとでお持ちしますわ。

小宮 いません。

静 寒くはありませんの？

小宮 寒いけれど、いません。

静 まあ……。

中村 寒いんだったら、火鉢にあたれよ。お前がそんなふうになっているかと思うと、おれもおちおち暖かくしていられないじゃないか。

小宮 気にするな。

静 あとでお持ちしますから、気がつかなくてすみませんでした。

中村 お嬢さんのせいじゃないですよ。ちゃんと知らない、こいつが悪い。

小宮 おれはいららないと言っている。

静 すぐですわ。ちよつとおじやまするだけですから。そうだわ。じゃあ、今、母に言つて火をおこしてくることにします。

小宮 やめてください。

静 なんですの？

小宮 いらないと云ってるじゃないですか。

中村 お前、お嬢さんに部屋に入られるのがいやなのか？

小宮 (小さな声) そんなわけじゃ……。

中村 だったら、おれがやってやる。それでいいだろ。

静 え？

中村 お嬢さん、すみません、こいつは、女と話すのに慣れてないんですよ。

静 でも……

中村 少しは慣れるよ。そんなじゃ、これからだって困るだろうに。

小宮、だまって立ち上がり、部屋へ。

中村 おい。まったく……。

加津がやってくる。

加津 小宮さんは？

静 またお部屋へ逆戻り。

加津 今日はどんなお話を？

静 火鉢の火がいらなとおっしゃって。

加津 あら、そう。手強いわね。火が消えていたのは知っていたのだけれど、寒くなったら出てくるんじゃないかと思って。

静 お母様、そんなことして……

加津 中村さん、あなたに言われて、私たち二人、なんとか小宮さんにうち解けていただくとうとずいぶん知恵をしばってきましたけれど、もうあごを出しますわ。

中村 奥さん。でも、あいつはずいぶん変わりました。前は出てきもしなかったのに、この頃はこうやって顔は出すようになったんですから。

加津 でも、一緒にお食事することは、三度に一度、いいえ、四度に一度もないじゃないですか。

中村 氷は溶けてきてるんです。お二人の力で。もう少しですから。どうぞよろしく願います。

加津 ……。

中村 あ、そうだ。じゃあ、僕が火をついできましょう。まずはそれからだ。

中村、立ち上がり、台所へ。

加津 あら、私がやりますよ。

中村 いいんです。まかしてください。

加津と静、顔を見合わせる。

加津 無理ね。

静 ええ。

加津、退場。

静、節子に向かい、

静 ねえ、毎日がこんななのよ。私たちは、中村さんに言われて、小宮さんとか近づこう近づこうとしているのに、ちつともうまくいなくて。

節子 それで沈んでらっしゃるの？

静 そうではないの。どうしたら小宮さんを引っ張り出すことができるか、その相談を母と中村さんと三人でしているときは、それは楽しいのよ。子どもがいたずらをたくらんでるようすで。

節子 あら、そう。ごちそうさま。

静 でも、話しているうちに気がつくのよ。中村さんは、ほんとうに小宮さんのことを心配してるんだなあ。私のことなんか、なんとも思っていないんだって。

節子 それが淋しいのね。

静 ……ええ。もうやめにしたいわ、こんなこと。小宮さんなんか、出て行ってくれればいいのに。

節子 わかったわ。節子にまかせて。

静 節子さん。

節子 あなた、中村さんに何とも思われていないのが淋しいのでしょうか？

静 ええ。

節子 だったら、こうしてみたらどうかしら？ 小宮さんのお世話をこれまで以上にしてさしあげるのよ。

静 なんですって？

節子 中村さんと一緒に小宮さんをどうにかしようとしている間は、あなたは中村さんにとつてただの道具、あら、ごめんなさいね。でも、そうじゃないかしら。だったら、今度はその道具が自立するのよ、中村さんをさしおいて、小宮さんと親しくなってしまうのよ。

静 そんなことしていいのかしら？

節子 いいのよ。そのせいで、小宮さんの心が溶ければ中村さんだって喜ぶはず。同時にあなたの存在を、アップピールするのよ。

静 アップピール？

節子 思い知らせるってことよ。あなたの気持ちが小宮さんに動いていると思ったら、中村さんはどうするかしら？ これは見物ね。

静 いいのかしら、そんなことして？

節子 いいのよ。やってごらんなさい。
静 ……わかったわ。

小宮が入ってくる。

小宮 何ですか？

静 私がお部屋に行きましたのに。すみません。

小宮 何ですか？

静 あの、ちよつと教えていただきたいんです。勉強を。

小宮 勉強？

静 ええ、もうじき試験なんです。

小宮 中村に聞いたらしいじゃないですか？

静 まだお帰りじゃありませんもの。

小宮 じゃあ、帰ってくるのを待ったらどうです？ もうまもなく戻るでしょう。

静 今、知りたいんです。学問ってそういうもんじゃありません。学びたいと思った、そのパッションが大切なんじゃ。

小宮 ……なんですか？

静 小宮さんは、何の勉強をしてらっしゃいますの？

小宮 あなたの勉強の話じゃないんですか？

静 ご専門は？

小宮 ……哲学です。

静 哲学？ 人のこころについての学問ですわね。

小宮 そんなところですか？

静 まあ、むずかしそう。さすが大学。女学校とは違いますわね。

小宮 質問は？

静 小宮さんは、どんな花がお好きですか？

小宮 花？ なんですかそりゃ？

静 このうちの花はみんな私が活かしているんです。あまり上手くはないんですけど。玄関も、床の間も、中村さんのお部屋も。もしよろしかったら、小宮さんのお部屋にも一輪挿しを置かせていただけたらなと思って。

小宮 いません。

静 ずっとお部屋にこもりっぱなしじゃ、息が苦しくなりませんこと？ 私、部屋の中に、

生きたものがあるってのは大事なことじゃないかと思うんです。

小宮 花は生きているんですか？

静 ええ、もちろんですわ。蕾が花開いて、そして散っていく。生きているからこそじゃありません。

小宮 おもしろい人ですね。あなたは。

静 あら、そうかしら。何の花がお好きですか？

小宮 桜ですかね。

静 桜？

小宮 ええ、田舎の家には大きな桜が何本もありました。雪国ですから、春は遅いんです。その遅い春によく桜が咲くと、それはきれいなもんです。春先には、名残の雪が降ったりします。そうなると桜と雪と一緒に風に舞ったりするんですよ。

静 まあ……。

小宮 どうしたんですか？

静 小宮さんから、そんなお話をうかがうなんて、意外でしたわ。

小宮 さあ、勉強するなら、早くしましょう。

静 あら、いけない。そうでしたわね。春になったら、桜の枝を活けてさしあげますわ。

小宮 ……。

静 お約束しますわ。

小宮 ……。

玄関の戸が開く音。

中村がやってくる。

中村 あれ、どうしたんだ？

静 お帰りなさい。小宮さんとお話してましたの。

中村 ……ああ、そうか。

小宮 勉強を教えてくださいと言われたんだ。(静に)あとは、中村に聞いてください。

小宮、退場。

中村 奥さんは？

静 買い物に。小宮さんは、ほんとうにお勉強がお得意になるのね。

中村 ええ、そうですよ。あいつは、本の虫だから。

静 お部屋には、横文字の本が何冊もあるんですもの。私は読めやしませんけど。

中村 あいつ、よく出てきましたね。しかも、お嬢さんと二人きりなのに。

静 あら、ほんとう。どうしたんでしょうね？

中村 勉強って、何ですか？ 僕でお役に立つなら。

静 あ、それはもうすみしましたの。じゃあ……

静、節子とともに退場。

一人残された中村。

加津が登場。

加津 中村さん、いいんですか？

中村 奥さん、いつも同じことをお聞きになりますね。
加津 あなたを見てるとはらはらしてしまつて。
中村 そんなに頼りないですか？
加津 いいえ、そうではなくて。あなたはとつても立派な方。お勉強もおできになるし、お友達思いで。でも、小宮さんは……
中村 なんです？ この一年で、小宮は、ずいぶんうち解けてきたじゃないですか？ 奥さんとお嬢さんのおかげです。ありがとうございます。
加津 ほんとうにいいんですか？ あなたはご存じないかもしれませんが、あの二人は、この頃、しょっちゅう一緒にいるんですよ。だからどう言う私じゃありませんけど、もしご存じないなら……
中村 知ってますよ。玄関先で靴を脱いでいると、小宮の部屋の方からお嬢さんの笑い声が聞こえるんです。どうしたんだと思つて、部屋に入ると、二人で紅茶を飲んでたりするんです。
加津 中村さん。
中村 はい。
加津 いいんですか？ とられてしまいますよ。
中村 とられる？
加津 ええ、そうです。
中村 ……
加津 私、ずつと思つていたのですよ。中村さんが、静をもらつてくれたら、どんなにいいだろうって。どうなんですか？
中村 どうって。
加津 うちはこのとおりの女所帯。あなたのような方がいてくださったらどれだけ心強いかな。
中村 こうしているじゃないですか？
加津 そうではなくて。これからのことですよ。こんなお願いをするのは、お恥ずかしいのですけれど、私が死んだら、あの子は天涯孤独になってしまう。頼る人もないんです。中村さんに、お願いできたらと、心底思うんですよ。
中村 そんな、奥さん。
加津 おいやですか？
中村 僕は、まだ身を固めたいとは思つてません。
加津 何かなさりたいことがありますの？
中村 いいえ。
加津 他に好きな方がありますか？
中村 いいえ。
加津 静がおきらい？
中村 それは……
加津 じゃあ、なぜ？
中村 この話はまた今度にしませんか？

加津 ……そうですね。私は、ただ、心配なんですよ。静と小宮さんの話をするとき、あなたがとても哀しそうな顔をしてらっしゃるから。

中村 ……。

加津 小宮さんに出て行ってもらった方がいいんじゃないやありません？

中村 やめてください。小宮は、大事な友達なんですから。
……。

加津

加津、退場。

中村、一人考えている。

小宮と静が入ってくる。

数日後の夕食後の時間。

卓袱台を囲んでの雑談の時間。

小宮は、一緒に卓袱台を囲む。

静 ずいぶん暑くなってきましたわね。お二人のお部屋、間のふすまを明けるとずいぶん

風が通るんじゃないやありません。

中村 開けっ放しじゃ落ち着かないだろう？ (小宮に) なあ？

小宮 おれは気にしないぞ。

中村 そうか、じゃあ、そうするか？

静 そろそろ、夏の支度をしなくてはいいけませんわね。すだれをかけて、風鈴も吊りませんこと。

中村 風鈴はどうだろう？

静 縁日の夜店で売ってるじゃありませんか、シダの寄せ植えにガラスの風鈴が下がっているのが。あれは見ているだけですしい気持ちになりますもの。じゃあ、いいですわね。

中村 お嬢さん。

小宮 いいですね。じゃ、一つ頼みます。

静 ええ。

加津が登場。

静 風鈴、よろしいそうよ。

加津 あら、そう。

静 小宮さん、今度の縁日に一緒に行きませんか？

加津 それじゃあ、四人で一緒に出かけましょうか、ねえ、中村さん。

中村 ええ。

静 それは素敵ね。

中村 素敵なんて言葉、はしたない。
静 あら、そんなことないわ。ねえ、小宮さん。
小宮 いいんじゃないですか？ 女学生はみんな使ってますよ。
静 ほら、ごらんなさい。

間

中村 そうだ、小宮、この夏は、どこかに出かけないか？
小宮 旅行か？
中村 ああ、避暑だ。
静 まあ、素敵。
小宮 おれはいい。
中村 金なら気にするな。
小宮 なんてわざわざ出かせなきやいけないんだ。
中村 旅先で太陽に当たるのはいいもんだぞ。
小宮 うちで好きな本を読んでもる方が勝手だ。
中村 日に当たった方が、お前の身体にはいいんだ。
小宮 おれの身体だ、気にするな。
中村 いいじゃないか、一緒に行こう。
小宮 一人で行けばいいだろう。
静 いっそ四人で出かけませんこと。
加津 いけません。
小宮 おれは行かない。
中村 どうしていやなんだ。
小宮 だから……
加津 (強く) いいから、行ってきなさい。二人一緒に！

間

加津 静と私も、夫の実家にお盆で帰りますから。その間は、留守になりますから、お世話もできませんし。出かけてもらえると、私も気が楽ですから。
静 みんな一緒に田舎に帰るのはどうかしら？
加津 何を言っているの。中村さん、小宮さん、では、行ってらっしゃい。

加津と静、退場。

卓袱台が片付けられる。

中村と小宮に雪駄と風呂敷包みと手ぬぐいが渡される。

二人、歩き出す。

そこは、千葉の海岸。
強い日差しが照りつける。

中村 暑いなあ。

小宮 ああ

中村 避暑じゃなかったのか？ なんだこの暑さは。

小宮 夏は暑いもんだろ。

中村 これじゃ、わざわざ出かけた意味がないだろ。

小宮 しかたない、奥さんに追い出されたんだ。

中村 おい、奥さんは、そんなつもりじゃ……

小宮 こうして宛もなく歩いてみるのはいいいもんだ。そう思わないか？

中村 まあ、そうだな。

歩いている二人。

中村 おい、少し山の方へ行かないか？ その方がラクになるにしろうだろうから。

小宮 行きたいなら一人で行け。

中村 房州に行ってみようと言ったのはお前だが、なんで海なんだ。避暑なら山だろう？

小宮 千葉にだって、山はある。

中村 あるが、すぐ海じゃないか。保田、富浦、那古、どこも漁村ばかりだ。なまぐさいな。

小宮 いやなら、帰れよ。

中村 お前は？

小宮 おれは、もう少し歩いてみる。

中村 そうか、じゃあ、おれもだ。

二人歩いている。

中村 傷が痛むのか？

小宮 ああ。

中村 なんで、お前は海に入る度傷だらけになるんだ？ 普通に泳いでいるだけなのに。

小宮 わからん、気がつくど岩場でひっかき傷ができているんだ。

中村 あとで、また薬、塗ってやるからな。

小宮 ああ。

二人、腰を下ろし、一息つく。

中村 次の村までどのくらいだ？
小宮 わからん。

中村も、座り、書物を広げる。
小宮、立ち上がり、崖の突端まで歩いていく。

中村 おい、危ないぞ。

小宮、そのまま海を見ながら立っている。

中村 こうしてここにいるのが、おれじゃなくて、お嬢さんだったらとは思わないか？
小宮 思わない。
中村 そうか。
小宮 お前はどうか？
中村 おれも思わない。

間

中村、立ち上がって、崖の突端まで出ると、突然、遠くに向かって叫ぶ。

中村 ああー！
小宮 ……どうした？
中村 ああー！
小宮 野蛮人か？
中村 (崖下の海を見て) おい、ちょっと来てみる。海がきれいだ。
小宮 ここからでも見える。
中村 いいから、来い。
小宮 なんだ？

小宮、立ち上がって、中村のそばの崖ぎわへ。

中村 (水の中をさして) あの魚はなんだ？
小宮 さかな？
中村 ああ、見たことがない形をしている。きらきら光って。ちょっと見てみる。
小宮 どれ？

小宮、身を乗り出して、海中をのぞく。
中村、小宮を崖からつきだして身体をささえる。

中村 こうして海の中へ突き落としたりはどうする？

小宮 やってくれ。

中村 死ぬぞ。

中村 お前も一緒だ。

間

中村、小宮を引き上げて、一緒に倒れる。

立ち上がり、

中村 行くぞ。

中村、歩き出す。

小宮も立ち上がり、歩き出す。

無言のまま歩く二人。

先を歩く中村は足取りが重い。

小宮 お前、どうかしたのか？

中村 なんだ？

小宮 ちっとも話をしなくなった。

中村 めずらしいな、お前がおれのこと気にするなんて。

小宮 一日、二人でいるんだ、気にもなる。何か、考えていることがあるのか？

二人、宿の部屋にあがる。

横になって寝る姿勢。

間。

やがて中村が話しかける。

中村 もう寝たか？

小宮 なんだ？

間

中村 お前は、こころに悩みや迷いが生まれたらどうする？

小宮 そんなものは、生まれないようにするのが一番だ。

中村 生まれてしまったら？

小宮 消し去る努力をする。

中村 そうか。それがいいのか？

小宮 ああ。悩みがあるのか？

中村 ああ。

小宮 何だ？

中村 いや、いい。お前に話すと、そんなものなくしてしまえと言われそうだ。

小宮 なくせないのか？

中村 ああ。たぶん、そうだ。

小宮 その悩みは、どんなものなんだ。

中村 もう、いい。

小宮 いや、話してみろ。

中村 もう、いいと言ってるだろう。

小宮 もし、その悩みや迷いがお前を墮落させるんだとしたら、お前は、それを捨て去らなくてはいけない。

中村 もし、それができなかったら？

小宮 できなかったら、じゃない。できるように努力するんだ。

中村 努力、できればなあ。

小宮 精神的に向上心のないものはバカだ。

中村 なんだって？

小宮 精神的に向上心のないものはバカだ。

中村 バカか？

小宮 ああ、そうだ。お前はバカだ。なぜ、努力しない。なぜ、よりよく、正しく、強く生きようと思わないんだ。

中村 おれは、正しく、強く、生きようとは思わない。

小宮 なぜだ？

中村 もう寝ないか？

小宮 いや、話そう。

中村 禅問答はたくさんだ。昨日行った寺の住職だってあきれてたじゃないか。

小宮 あそこは、日蓮が生まれたと言われる寺なんだ。そんな寺の住職があのかげんさは何だ？ おれの方があきれた。

中村 そうか、おれは人間らしい、いい人だと思ったがな。

小宮 人間らしいか？

中村 ああ。（思いついて）そうだ。おれは、人間らしく生きたい。

小宮 人間らしく？ それがお前の弱いところだな。人間らしくという言葉に、逃げ込んで、今の自分をゆるしてしまっているんだ。

中村 そのどこが悪い。じゃあ、言わせてもらうが、お前はよほど人間らしくないぞ。

小宮 おれが人間らしくないのか？

中村 ああ、そうだ。

小宮 （強く）どこが、どんなところがだ？

中村 ああ、悪かった。お前は人間らしいんだ。人間らしすぎるんだ。でも、口の先では、人間らしくないようなことを言うんだ。振る舞おうとするんだ。

小宮 結局、人間らしくないんだな。そうか。

中村 どうした？ 昼の禅問答の続きだ。本気にするな。

小宮 本気じゃないのか？

中村 いや、そういうわけじゃ。

小宮 おれは、修行が足りないから人にはそう見えるのかもしれないな。

中村 お前は人間らしい、いいやつだ。だが、修行のせいで人間らしくなくなってるんじゃないか？

小宮 それは修行のせいじゃない。おれが、おれの根本が人間らしくないんだ。

中村 あまり思い詰めるなよ。じゃあ、寝るぞ。

小宮 おれと話したくないのか？

中村 もう寝る。

小宮 おい。

中村 これ以上話すと言わなくていいことを言ってしまうそうだ。

小宮 なんだ、言ってみろよ。

中村 いや、いい。

小宮 言ってみろ！

中村、起き上がる。

中村 ……もう帰らないか？ 奥さんたちももう帰ってるころだ。

小宮 ……そうだな。帰るか。

中村 ああ。

静と加津が登場。

場面は小石川の下宿。

加津 まあ、お帰りなさい。

静、笑い出す。

加津 なんですか？

静 だって、二人とも日に焼けて。別人のよう。

加津 ずいぶんやせたんじゃないやありません、でも、すっかり元気そうになって。

静 やせたのに、元気そうなんて矛盾してないこと。

加津 だって、そうなんだから。

静 中村さん、お風呂を湧かしておきましたわ。お先にどうぞ。

中村 ああ、すみません。小宮が、すり傷だらけなんです。買い薬でごまかしていたんですが、医者に行った方がいいかもしれません。

静 まあ、それは大変。お母様、見てさしあげて。
加津 (小宮に) じゃあ、お部屋に行きましようか？
小宮 ……はい。

小宮と加津、退場。

静 おかえりなさい。

中村 それはもう聞きました。

静 何度言ったっていいじゃありませんか？ なかなか帰ってらっしゃらないから、心配
していたんですよ、本当は。

中村 小宮が、なかなか帰ると言わなくて。

静 お帰りなさい。お待ちしていました。お風呂、早く入ってくださいね。私、お湯を見
てきますわ。

静、退場。

中村、しばらく静を見送っているが、文机とランプの前に座る。

場面はかわって、中村の部屋。

二月後の夜。秋。

小宮 起きてるか？

中村 ああ。

小宮、入ってくる。

中村 なんだ？

小宮 昼間のことだが…

中村 どうかしたか？

小宮 偶然なんだ、お嬢さんと会ったのは。

中村 なんだ？

小宮 ほんとうに偶然なんだ。

中村 おれは何も言っていない。

小宮、部屋を歩き回る。

小宮 奥さんとお嬢さんはどこに行ったんだ？

中村 市ヶ谷のおばさんのところじゃないか？

小宮 親戚か？

中村 うちの奥さんと同じ軍人の細君だ。
小宮 お嬢さんの親父さんはどこで戦死したんだろう？
中村 さあな、おれも聞きにくいから話したことがない。
小宮 そうか。女手一つで娘を育てるのは大変だったろうな？
中村 小宮、お前、どうかしたのか？
小宮 お前、お嬢さんをどう思う？

間

中村 おれは、別に何とも思わん。
小宮 そうか。
中村 ああ。お前はどうかんだ？
小宮 おれは、おれも何とも思わん。
中村 そうか。
小宮 いや、それは嘘だ。おれはあの人のことが忘れられない。中村、お前は、恋をしたことがあるか？
中村 あ、ああ。
小宮 それはどんな気持ちだ？ 苦しいものか？
中村 ああ、苦しいなあ。
小宮 おれも苦しい。なんだ、この苦しさは。
中村 本当にそれは恋なのか？
小宮 わからん、どうなんだ？
中村 おれに聞くな。
小宮 決めてくれ。
中村 お嬢さんのことが忘れられないのか？
小宮 ああ。
中村 離れていると会いたくなるのに、一緒にいるとどこかに行ってほしいと思うのか？
小宮 ああ。
中村 そうか、それは恋だな。
小宮 そうか。
中村 ああ。
間
小宮 中村、おれはどうしたらいい？
中村 ……精神的に向上心のないものはバカだ。
小宮 ……
中村 精神的に向上心のないものはバカだ。

間

小宮 バカだ、おれはバカだ。

中村 そうだ、お前はバカだ。

小宮 バカだ、おれはバカだ。

中村 ああ、お前はバカだ。あの夏、お前は言ったじゃないか、精神的に向上心のないものはバカだって。そのバカになるのか？

小宮 もう、この話はやめよう。やめてくれ。

小宮、部屋を出て行こうとするが、中村がつかまえる。

中村 やめてくれて、おれがいい出した事じゃない、もともとお前が言い出したんじゃないか？ おれは別にかまわんが、お前の方にそれをやめるだけの覚悟がなきゃおかしんじゃないか？

小宮 やめた方がいいというのか？

中村 そうは言わないが、お前がいつも言ってた話は、どうなる？ 女なんてくだらん存在なんじゃないのか？ これまで軽蔑していた相手が忘れられなくなったのか？ 正しく、強く、生きようと言っていた、あの言葉は何だったんだ？

小宮 それは……

中村 おれはお前が信じられなくなった。いや、失望した。

小宮 覚悟ならないこともない。

中村 覚悟？ どんな覚悟だ？ 生き方を変えるのか？

小宮 つまらん話を聞かせた。じゃあ。

中村 おい。覚悟ってなんだ？

小宮、部屋へ引っ込む。

中村、机の上のランプを見ている。

火を吹き消すと丸くなって眠る。

間

鈴木と小久保と滝口が登場する。

鈴木 なんだ元気そうじゃないか？

小久保 仮病なのか？

中村 (起き上がって) 何しに来た？

鈴木 お前の様子を見に来た。小宮から、昨日から具合が悪くて寝てると聞いたんでな。

滝口 お嬢さんは？

中村 まだ、帰らない。

滝口 節子さんと一緒かな？

中村 ああ、そうだろう。

滝口 じゃあ、ゆつくりしていくか。

鈴木 中村、お嬢さんとの縁談はどうなった？

中村 おい、よせよ。

瀧口 縁談？

鈴木 この奥さんにお嬢さんをもらってくれないかと言われたのに、断ったんだとき。

滝口 もつたいない話だな。

鈴木 ああ。

滝口 考え直したらどうだ？

中村 そうだなあ。

玄関の戸が開く音。

静の声 ただいま。

節子の声 おじゃまいたします。

滝口 節子さんだ。

滝口、出て行く。

鈴木 おい……。 (中村に) おれからの忠告だ。これはお前にとっちゃいい話だと思っぞ。

お前にはこれとってやりたくないこともないだろう。だったら、このへんで身を固めておいた方がいい。今、やりたいことがなくても、いつか見つかるかもしれない。その時になって、一人でいることを後悔するよりは、今のうちに相方を見つけておいた方が身のためだ。

中村 相方か？

鈴木 ああ。おれは、滝口のように女の尻を追いかけようとは思わない。お前もそうだろう。だが、結婚するのはいい仕組みだとは思わないか。きっとまた戦争が始まる。今度はロシアだ。おれは死にたくない。戦死なんてまっぴらだ。そのためなら、なんだってやる。だから、お前もふらふらしてるよりは、何か見つけた方がいいぞ。

中村 お前は どうするんだ？

鈴木 おれは、なんとかうまくやる。だから、おまえもな。おれはお前のことが放っておけないんだ。

中村 すまない。

加津の声 鈴木さん！

鈴木 はい。

鈴木、退場。

小久保 お前は、小宮のことが好きなんだろう？

中村 なんだ。また、得意の男色話か？

小久保 そうじゃない。お前のことだ。

中村 おれが小宮のことを？

小久保 ああ、違うか？

中村 違う。

小久保 そうか。どれだけ思っても、小宮はお前のことを思うようにはならんぞ。鈴木がお前のことを思うほどにもな。つらいなあ。でも、それに耐えていくのも、また道じゃないか。

中村 道ってなんだ？

小久保 恋ってやつだ。

中村 ……お前は結婚しないのか？

小久保 ああ。

中村 男色の伝統は、成人したら結婚するのが当たり前なんじゃないか？

小久保 ああ、そうなんだが、おれは、そうは割り切れんようになった。

中村 そうか。

小久保 そうだ。お前も、自分の好きなものが何なのか、ちゃんと考えないとな。

小久保、退場。

中村、見送っている。

加津がやってくる。

加津 みなさん、お帰りになりましたよ。おかゆでもお持ちしましょうか？

中村 いや、いいです。小宮は？

加津 今日は遅くなるとおっしゃってましたよ。

中村 そうですか？ あいつ、何か言ってますませんでしたか？

加津 何を？ あなたには何かおっしゃったんですか？

中村 いいえ。

加津 そうですか。

間

中村 奥さん、お嬢さんを私に下さい。

加津 ……

中村 奥さん、お嬢さんを私に下さい。

加津 聞こえますよ。

中村 下さい、ぜひ下さい。私の妻としてぜひ下さい。

加津 まあ、上げるのはいいですけど、急じゃありませんか。

中村 急にもraitakくなつたんです。

加津 まあ、あなた……（笑う）よく考えたのですか。

中村 以前、奥さんに言っていたことが、ずっと気になっていました。あれからもうずいぶんになります。言いだしたのは突然でも、考えたのは突然ではありません。

間

加津 よござんす、差し上げましょう。差し上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰って下さい。ご存じの通り父親のないあわれな子です。よろしくお願ひしますよ。ああ、よかつたこと。じゃあ。

立ち上がる。

中村 あの、もういいんですか？

加津 ええ。

中村 質問とか条件とかそういう話？

加津 かまいません。この三年ばかり、一緒に暮らしてきたんですもの。あなたのことなら、実の親御さんたちより、よく知っている私です。安心してお任せしますよ。

中村 親戚に相談したりしないんですか？

加津 かまいやしません。後で話しますから。

中村 あの、お嬢さんは……

加津 かまいやしません。

中村 でも……

加津 大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから。

中村 でも、話してはくれるんですよね？

加津 ええ、そりゃ。

中村 いつです？

加津 さあ、あなたのいい時に話しますよ。どうします？ 早い方がよければ、すぐ話しましょうか？

中村 あ、ちよつと待ってください。

加津 静！ ちよつといらつしやい。

静、登場。

静 何？（中村に）もう病気は治りまして？

中村 ええ、治りました、治りました。

中村、立ち上がり、部屋を出て行く。

加津 あら、あなた。

中村 少し歩いてきます。

中村、退場。

町を歩いている。

一回りして、戻るとそこは茶の間。

卓袱台を囲んで、加津と小宮がいる。

加津 お帰りなさい。遅かったじゃないですか。

小宮 具合はどうだ？ 医者にも行ったのか？

中村 ……

小宮 どうした？

加津 夕飯の支度をしますね。

中村 お嬢さんは？

小宮 さつきから呼んでいるんだが、出てこないんだ。静さん！

静の声 ただいま。

小宮 まだだ。

中村 どうしたんだろう？

加津 おおかたきまりが悪いんでしょう。

小宮 なんできまりが悪いんですか？

加津 さあ？ お待ちくださいね。

加津、退場。

小宮、中村の顔を見ている。

中村、顔を背けている。

小宮、退場する。

中村、一人残っている。

場面は変わって、5日後。

加津 中村さん、小宮さんにあのことを話しましたか？

中村 はい、いえ。

加津 どっちなんです。

中村 まだ、話していません。

加津 もう五日も経ってるじゃないですか？ なぜ話さないんです。

中村 すみません。

加津 道理でわたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。いつもあんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは。

中村 あいつ、何か言ってますでしたか？

加津 別に何も。

中村 どんな様子でしたか、話を聞いて。

加津 たいした話ありませんでしたよ。

小宮、登場。

加津 ああ、小宮さん、中村さんから聞きました？

小宮 何のことでしょう？

加津 中村さんが静と結婚するんですよ。申し込みをされたんです。

間

小宮 あ、そうですか。

加津 あなたもよろこんでください。

小宮 (微笑んで) おめでとうございます。それはよかったです。

加津 ええ。

小宮、歩き出すが振り返って。

小宮 結婚はいつですか？

加津 まだ、わかりませんわ。二人が相談して決めるでしょうけれど、なるだけ早くと私は思ってますの。

小宮 何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません。

加津 気持ちだけで十分ですよ。喜んでくだされば。

小宮 ……

小宮、退場。

加津 これだけのことですわ。

中村、後を追って立ち上がる。

中村 小宮！

加津 中村さん！

中村 ……。

加津と中村、退場。

小宮の部屋。

小宮が倒れている。

中村が登場する。ランプを手にしている。

中村 おおい、小宮。寝てるのか？ 小宮？ おい！ おい、どうかしたのか？

返事はない。

中村、小宮を見つめる。

明治2の木下が登場して、「こころ」を読む。

木下（藤原） その時私の受けた第一の感じは、突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたあさまつたと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。私はすぐ置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。手紙の内容は簡単でした。自分は意志薄弱で到底、行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった札が、ごくあっさりとした文句で付け加えてありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に書き添えた、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。私は手紙を元の通り置きました。そうして振り返って、襖に迸っている血潮を始めて見たのです。

中村、語られる中、横たわった小宮の回りを、そのままに動く。

部屋を出ていき、加津を呼ぶ。

中村 奥さん。

加津 （登場して）なんですか？

中村 小宮は自殺しました。

加津、小宮の部屋に入る。

中村 すみません。私が悪かったです。

加津 仕方がないじゃありませんか。医者呼びましょう。
中村 医者なんて……

加津、部屋を出て行く。
中村、泣き崩れ、小宮にすがりつく。
号泣する中村。

暗転

大正元年。秋。夕方。
中村の部屋、茶の間。
静と節子、滝口、鈴木、小久保がいる。

節子 まあ、なつかしい。何年ぶりかしら？ おばさまがお亡くなりになってからだから……
静 五年になりますわね。

節子 ごめんなさいね。すっかりごぶさたしてしまつて。

静 いいえ、こちらこそ。

節子 どうして結婚式に来てくださらなかったの？ 西洋式にテーブルを囲んでパーティをしたんですのに。

静 うちの人が外に出るのをいやがりますの。

節子 静さんお一人で来てくださってもよかったのに。ねえ、あなた。

滝口 ああ、そうだな。

静 それで、赤ちゃんはいつのご予定？

節子 お正月時分だろうって。ねえ、静さん、子どもというのはいいものね。そりやとても苦しいけれども、四六時中、命ということを実感できるんですもの。静さんのところも早く、おできになるといいわね。ねえ、あなた。

滝口 ああ、そうだな。

静 ええ。ほんとうに。

間

鈴木 中村は遅いんですか？

静 ちよつと雑司ヶ谷まで散歩に行くと言っていましたから、もうじきに。

鈴木 雑司ヶ谷？

小久保 小宮の墓参りだろう。

鈴木 ああ、そうだったな。

節子 ねえ、静さん、あのテーブルはどうされて？

静　うちの人が処分してしまいましたの。小宮さんが亡くなってすぐ。

節子　まあ、もったいない。うちでも同じようなのをあつらえたのよ。家族そろって、食事ができるように。

静　まあ、それは素敵。

節子　ええ。今度、ぜひ遊びに来てちょうだい。

中村が帰ってくる。

静　おかえりなさい。

中村　どうしたんだ？　みんなそろって？

鈴木　挨拶に来た。

中村　みんなそろってか。

鈴木　そこで偶然会ったんだ。

中村　そうか。それより、号外を配っていた。乃木将軍が殉死したぞ。

一同　ええ？

手にした号外を鈴木に渡す。

一同、見入る。

節子　天皇様が亡くなってもうひと月も経つのに今頃？

鈴木　昨夜だそうさ。御大葬の号砲と共に命を絶ったって。

滝口　殉死か。

節子　無駄死にだわ。

滝口　何を言う？

節子　後を追って死んだからって何になるんです？　そんな勝手な。

小久保　錦の御旗を取られてから三十五年か。

中村　天皇が亡くなった時、おれは思った。明治というこの時代の影響を最も強く受けた俺たちが生き残っているのは、畢竟時代遅れじゃないかって。

滝口　時代遅れ？

中村　そんなことを静に言ったら、じゃあ、殉死したらいいじゃないかと言われた。

静　あれはほんの冗談です。

節子　時代遅れだろうとなんだだろうと、死んだら何もならないじゃないですか。ばかばかしい。

中村　生きてきた三十五年が苦しいか、死ぬ刹那が苦しいかどっちだろうな？

鈴木　そりゃ、生きてきたのが苦しいから死ぬだろう。

節子　死ぬほど苦しい思いで三十五年も生きてきたなら、あともう少し生きていけばいいと思いますわ。ねえ、静さん。

静　ええ、ほんとうに。

間

鈴木 それじゃ、俺は行く。お前の顔が見れてよかった。

中村 まだ、いいじゃないか。

鈴木 いや、そうもいかない。いろいろ支度があつてな。おれはまたロンドンに行ってくる。

中村 これで何度目だ。

鈴木 今度、大学で教鞭をとることになつてな。どうも便利に使われていけない。

中村 忙しいのは何よりだ。達者で暮らせよ。

鈴木 お前もな。

静 (立ち上がり) どうもおかまいもありませんで。

中村 お前、市ヶ谷の叔母さんのところへわ行くのじゃなかったのか？

静 ええ、そのつもりだったのですけれど。

節子 だったら、そう言つてくださった方がいいのに。じゃあ、私たちも生きましょう。

滝口 ああ、そうだな。

節子 また昔のように仲良くしましょう。ねえ。

静 ええ、ぜひ、そうさせてもらいますわ。

節子 うちにも遊びに来てちょうだい。今度、この人が社長になって新しい事業を始めます

の。横浜に大きなビルディングを建てるのよ。道々、おしゃべりしましょう。

静 ええ。(中村に)それじゃ、行ってきます。

中村 ああ、行っておいで。

静 大丈夫ですわね。

中村 なんだか心配ですの。

静 何が？

中村 あなだが。

節子 何ならうちから女中を一人寄越しましょうか？

中村 いや、結構。心配することはない。いいから行っておいで。

静 わかりました。では、行ってまいります。

滝口、節子、鈴木、静、退場。

中村 小久保、お前は何の用だ？

小久保 お前の顔が見たくなつたんだ。

中村 なんだそりや。今は何をしている？

小久保 おれは軍隊に入った。近々外地へ派遣されるらしい。

中村 大丈夫か？

小久保 ああ。知ってるか？ 日本の軍隊が強いのは、男色の伝統による男たちの結束なん

だとき。

中村 もう、強さも威張れないだろう。さんざんな目にあっただから。

小久保 まあ、そうだがな。お前、小宮の墓にはよく行くのか？

中村 ああ。

小久保 おれもこれから寄ってみるとするか。

中村 お前だけだ、まだあいつのことを忘れないのは。

小久保 お前もだろ。じゃあな。

小久保、退場。

間。

中村、ナイフを取り出して、じっと見ている。
と、木下が登場する。

木下 先生！

中村 木下くん。

木下 中島先生！

中村 え？

藤原 藤原です。

中島 ちよつと待って。何で君がここに登場している。

藤原 僕、先生が何で死ぬのか、知りたくって。だったら、本人に聞いてみるのが一番だつて。

中島 そんな、本人って……

藤原 どうして死ぬんですか？

中島 それは、漱石も、作中の先生に言わせてるじゃないか。遺書の中で。明治が終わって、乃木大将が死んだからって。

藤原 遺書は嘘だって言ってるじゃないですか？

中島 何を言ってるんだ？

藤原 先生だってそう思ってるんじゃないですか？ そんなの口実だって。どうして死ぬんですか？

間

中島 これからどうして生きていけばいいんだ？ そう思ったのかもしれないな。

藤原 ……

中島 これから生きていくのはつらい、そう思ったのかもしれないな。

藤原 これまで生きてきた十数年よりも？

中島 明治のはじめの男色は、大正になると、変態性欲ということになってしまふ。おおらかに許されていたものが、忌まわしく汚らわしいものになってしまふんだ。そうなるまえに、死んでしまおうと思ったのかもしれない。明治が終わったということをお

に。違うかな？

藤原 あ、そうか。

中島 先生は、きっと小宮への思いをずっと胸に秘めていて、それを乃木大将の殉死を口実に、実現したんだ。死んだように生きてきた先生が、死ぬ理由を見つけて死んだんだ。喜ぶべきじゃないのか？ そうだよ、これは後追い心中だ。これで、きみも満足んじゃないか？

藤原 わかりました。でも、死なないでください。

中島 なんだって？

藤原 先生、死なないでください。

中島 ちよつと待って……

藤原 手紙、受け取りました。大急ぎで帰ってきました。父のことなんかほっておいて。よかつた間に合って、先生、死なないでください。

中島 ちよつと、待った。「こころ」をどう解釈するのも、勝手だが、それはねじまげすぎだろう。

藤原 漱石は、「私」が遺書を読み終えるところまでしか書いていません。僕思うんです。

私はぎりぎり間に合うんじゃないかなって。

中島 それは無理だ。冒頭に、先生が亡くなってからもうずいぶんになるって、語り手の

「私」はそう断ってるんだ。

藤原 でも……

中島 それはありえない。

藤原 でも……

中島 無理だ。

藤原 でも、でも、それじゃいやなんです。

中島 なぜ？

藤原 生きてほしいから。

中島 ……

藤原 先生には小宮への思いを認めて、許して、生き続けてほしいから。僕には、先生がとても身近な人に思えるんです。いいんです、迷ってるあのの人に、昔は大変だったんだねって言ってあげたいんです。でも、今じゃそんなの普通だよって。その気持ちわかるよって。一人じゃないから。みんな、そんな気持ちでいるからって。死ぬなって。

中島 明治の学生はそんなこと言わない。

藤原 これは、二十一世紀の僕が言ってる言葉です。明治の先生に。

中島 そんなものが届くわけない。

藤原 届きますよ。きっと。

中島 架空の人物と現実を混同しちゃいけない。

藤原 でも、僕には、あの人たちが生きていたように思えてしかたないんです。

中島 それは、漱石の筆の力だ。

藤原 小説は時代を映す鏡なんじゃないですか？

中島 鏡は現実そのものじゃない。きみが行間を読んだのはわかった。なかなかおもしろい。抜き出した部分だけを読めば、たしかにそう解釈もできる。でも、現実と作品を混同しちゃいけない。僕は一つの物語としてこの「こころ」という作品を読まなくてはいけないんだ。

藤原 でも、僕には、どうしても、あの人たちがあの時代に生きていたように思えてしかたないんです。なぜだかよくわかんないけど。あの時代をあんなふうに生きて、あんな風なことを思った人はきつといたんじゃないかって。どうしてもそう思えてしかないんです。

中島 どうしても？

藤原 ええ、どうしても。

間

中島 生きていたかもしれないな。なんだかそんな気がしてきた。

間

藤原 また海に行きませんか？ 鎌倉の海に。

中島 いや、千葉にしよう。一緒に歩いてみないか。あの二人が歩いた道を。

明治の夏の海がよみがえる。

現代の学生たちが登場する。

そして明治の学生たちも。

青い空。まぶしい日の光。

幕

劇団フライングステージ第44回公演「新・こころ」

二〇一六年三月三〇日（水）～四月三日（日）

SPACE 梟門

原作 夏目漱石「こころ」

作・演出 関根信一

出演

中村哲郎／中島 徹	……	尾崎太郎
小宮幸彦	……	北川義彦
木下雄二／藤原柁之	……	野口聡人
秋山（中村）静	……	石関 準
渡邊節子／木下はる／富沢瑞希	……	モイラ
鈴木敏行／木下虎之助／市川智樹	……	小笠原游大
滝口政伸／医者／斉木達也	……	齋藤 真
小久保良一／込山健吾	……	小浜 洋
秋山加津／吉永聡美	……	関根信一

照明

伊藤 馨

音響

樋口亜弓

衣裳

石関 準

制作

渡辺智也

フライヤーイラスト

水月アキラ

フライヤーデザイン

岸本啓孝

協力

三枝 黎

ちるぢる

石原 燃（燈座）

十七戦地

劇団ひまわり

池林房・太田篤哉

CoRich 舞台芸術！

劇団フライングステージ

企画製作